

「蕪崎市第6次長期総合計画」策定記念 まちづくりシンポジウム 開催記録

1 シンポジウムの概要

①日時、場所

日時：平成21年4月25日（土） 13:30～16:00（開場 13:00）

場所：東京エレクトロン蕪崎文化ホール 小ホール

②開催内容

1 主催者あいさつ

2 まちづくり講演会

「協働ってなに？ 市民がつくるまちづくり」

講師：前山梨県立大学国際政策学部教授 市原 実

3 パネルディスカッション

「協働でひろがる新たなまちづくり」

パネリスト：山本知恵（子育てサークルピーターラビット）

伊藤啓子（蕪崎市シニア健康サポーター）

清水 一（甘利山倶楽部会長）

石川和仁（穂坂町ふるさと協議会会長）

高木智朗（NPO 法人にらさき味噌汁学校代表理事）

山田七穂（蕪崎市商工会青年部部長）

小尾千秋（図書館ボランティアサークルポラン代表）

横内公明（蕪崎市長）

コーディネーター：市原 実（前山梨県立大学国際政策学部教授）

③資料

- ・シンポジウムプログラム（レジュメ）
- ・蕪崎市第6次長期総合計画概要版
- ・まちづくりシンポジウム アンケート

④参加者数

約150名

2 開催記録

①主催者あいさつ（蕪崎市企画財政課長 水川秋人）

皆さま、こんにちは。私たちの目を楽しませてくれました桜の花とか桃の花が散りまして、新緑がまぶしい良い季節となりました。本日はご来場いただきましてありがとうございます。また、お足元の悪い中ご来場いただきまして本当にありがとうございます。冒頭に市長が皆さんに挨拶するところがございますけれども、他の公務がございまして、この後のパネルディスカッションのほうに参加するというので、そちらのほうでパネリストとして参加させていただくことをまずご了承願いたいと思います。さて、第6次長期総合計画につきましては、この3月議会におきましてご承認をいただきまして、その概要版につきましては、全てのご家庭のほうにお配りさせていただきました。この長期計画というのは申すまでもなく、今後の市の方針といえます



か、いろんな施策の方向性を示す大事なものでありまして、我々もそれに沿っているような施策を進行していくといった大事なものでございます。今回、この策定にあたりまして、特徴的なことがございました。その一つは計画の策定にあたりまして、市民の多くに方に関わっていただいて何日、何時間もかけて策定に加わっていただいたということ、それから今回、キーワードとして市民と行政が協働で、共に働くという意味ですけど、事業を推進していこうということ盛り込んだことが大きな特徴でございます。ご案内のとおり、少子高齢化に伴う人口の減とか環境問題とか、それから地域の安心安全とか過去にはなかったいろんなテーマがこれからの行政の課題として載ってくる訳ですけど、厳しい財政状況の中でなかなか全てのものを解決するのは難しいと考えておりまして、その中で一つ浮かんできたのが市民と行政と、あるいは民間と民間、あるいはいろんなところとの協働作業で物事を解決していこうというのが今回生まれた発想でございます。本日はこの後、この長期計画の策定にご尽力いただきました、市原実先生の基調講演のあと、市内各所各分野でご活躍なさっている方々によりまして協働についてのディスカッションを展開していただいて、これからのまちづくりのキーワードであります協働について考えていただいて、また、その考えが広く市民の方に伝わっていけば良いなという趣旨で今回開催させていただきました。短い時間ではありますが、この後有意義な時間を過ごしていただきたいと思っております。簡単ではございますけれども、開会にあたりましての主催者としての挨拶とさせていただきます。本日はご苦勞様でございます。

②まちづくり講演会 ～協働ってなに？ 市民がつくるまちづくり～

(司会者)

それでは、これよりまちづくり講演会「協働ってなに？市民がつくるまちづくり」を始めさせていただきます。ここで講師の先生についてご紹介いたします。プログラムの中ほどをお開きください。市原実先生は1942年に千葉県でお生まれになりました。慶應義塾大学をご卒業後、民間会社に勤務の傍ら、中小企業診断士の資格を取得されました。長崎総合大学教授を経て、2005年より新設されました山梨県立大学国際政策学部の教授としてまちづくり、まちおこしを専門にご活躍されこの4月からは聖学院大学の講師をお努めになっています。2007年11月からこのたび策定いたしました、蕪崎市第6次長期総合計画の審議会会長を務めていただきました。それでは市原先生よろしくお願いたします。

(市原)

どうもこんにちは。外は大変な雨の中、おいで頂きましてありがたく思っております。今日はテーマがテーマでちょっと難しいなというふうに皆さんお思いかと思っておりますが、できるだけ事例を含めてですね、お話をしていきたいと思っております。今日、皆さんのお手元にこのような資料が配られていると思います。“夢と感動のテーマシティにらさき”今回作られました、蕪崎市第6次長期総合計画、なんか厳しいですね、いや何てことはない、10年に1回作っている計画なのですね。第6次というわけですからもう6回目ということになっているわけです。先ほど、課長さんもおっしゃっておられましたように、この長期総合計画によって行政のいろいろなプログラムが毎年作られているということで、一種のガイドラインになるわけです。おこがましい、ちょっと日本語では難しいのですが、私たち、本当素人の方々、また、この道の詳しいプロの企業の方、そういった方々も一緒にいたしまして、この審議会委員会というものを立ち上げました。立ち上げた後ですね、実は市民の皆さんからいろいろなご協力をいただきました。一つはアンケート、皆さんの中にはアンケート用紙が届かされたかと思いますが、これもちゃんと地区ごとに、あまり一箇所に固まってはけませんから、それぞれ機械的にピックアップいたしまして、それでアンケートをとらせて頂きました。それから、ワークショップといいまして、商工会の代表の方、まちづくりの代表の方、あるいはシニアの代表の方、自治会の代表の方、そういう方々もお集まりいただきました。それで何と3回、さらにあとそれにプラスしてですね、またワークショップを立ち上げました。そういうことで、本当に夏の暑い時、1年以上をかけてこの基本計画を作らせていただいたわけでございます。この基本計画、各市、各自治体がみな作って



いるわけですが、そういったものを見ますと、ほとんど作文なのですね、私に言わせれば。これこれこういうことを検討します。こういうことを努力いたします。ということで、極めて曖昧なのですね。それじゃいかなんと、私は密かに思いました。それで委員会の席で、これでは他の自治体の作っているものとあまり変わらないんじゃないですか、やっぱり今のような時代はきちんと何をどうしていくかという具体的な中身が必要ではないのですか、とは言うものの10年計画ですからそんな先までわかりません、私自身も生きていくかどうかわかりません。そんな状態ですから、そう先まではできないけれど一応これは3年をサイクルとして計画を途中見直しながら進んでいくという、こういう中身でございます。そういうことで、実は新しい項目を二つ入れました。これ私ね、本当に皆さん頭の良い人がいるんですよ、知恵のある人が、これじゃいけないよということですね、一つはやはりですね、数値目標を入れよう。皆さんは全部の方この本編といいますか、冊子がたぶん予算の関係で届いていないと思います。ですからこの中身のちらっとだけこういう形になっているんですよということをご説明しておきたいんですね。実は全部のですね、項目の中で6つ大切なことが書かれています。私が言うのもおかしいのですが、飛ばして悪いのですが、0405というところをちょうど真ん中を開いていただけますか。左側がテーマとして“夢と感動のテーマシティにらさき”ということが大きく書かれています。その下に実はこれも新しい言葉でですね、“まちづくり人口”



いわば蕪崎市は4万人の都市としてこれからどういうことをしていこうかということで、これが一種の基準になっています。4万人というのは定住人口、いわゆる夜間人口が3万5千人、それから交流人口というのは、外から見られる方、これは観光も含めて、あるいは企業でお勤めになっている他の地区に住んでいて昼間、蕪崎市で働いている方、こうした方々も含めていわば4万人のまちとしてこれを基本計画の一つの土台部分といたしました。そしてその右側のほうにこれからの取り組みの方向ということで、基本方向1と書いてありますね。“将来を担う子どもをのびのび育むまちづくり”、それから基本方向2が“誰もが安心して暮らせるまちづくり”、恐れいりますが次を開けていただけますか06というページですね。真ん中へんに基本方向3としまして“心地よい定住環境のあるまちづくり”、それから07のほうを見て頂けますと、基本方向4として“魅力あふれるまちづくり”、続いて最後の08のページを見ていただけますか。基本方向5のところ“人が集う交流のあるまちづくり”、それから下のほうに基本方向6として“健全な行政活動によるまちづくり”、こういう大きくは6本の柱でこの基本計画を組み立てているということです。そして、その基本計画の中に、先ほど申し上げましたように何か新しい内容を加えようということで、二つほど加えました。一つは数値目標、一つは協働のモデルというのが各項目ごとに全部書かれております。ちなみにちょっといくつか紹介いたしますと、本編の63ページを見ますと、ここに“将来を担う子どもをのびのび育むまちづくり”ということに実は図書館ボランティアの活動というのが書かれています。後ほど、図書館ボランティアの活動をしている方がパネリストとして登壇されますので、細かいことは後ほどということにさせていただきますが、このボランティア活動、これも行政と民間の方々がタイアップしてする事業なんですね。それで具体的な数値目標として何が書かれているかと言いますと、例えば、子育て広場の利用者数を平成19年度は5,181人ですが、これを平成30年には6,200人に増やしていこう、といったことが書いてあります。さて、次ですね。いくつかだけ紹介させていただきますね。こんなことが書いてあるということを知って頂きたいからです。今度は“誰もが安心して暮らせるまちづくり”というところにこんなことが書いてあります。“向こう3軒見守り隊”何々したいっていうの“たい”が隊列の隊、自衛隊の隊という字が当てはめてあるのですが、“向こう3軒見守り隊による一人暮らし高齢者の見守り”これもですね、だんだんだんだん独居老人、あまり良い言葉ではないんですね、独居老人って言うのは。そういう方々をやはり近所がですね、支え合おうじゃないかということでですね、そういった人を募集いたしまして、それを組織化していく、こういうことを計画の中に入れております。これまた行政はそうしたことを全然タッチしていませんでした。ただ、行政だけではそうしたことはできにくいですから、やはり民間の方々にも協力していただく、こういうことですね。それでそのこのところの項目の中に指標としてですね、将来の数値目標としては、福祉ボランティア参加者数を平成19年度は650人であるものを平成30年度には800人に増やしたい、こういうことを書かしていただいております。こんなところもありますよ。例えば、“誰もが安心して暮らせるまちづくり”のところには協働のモデルとして、消防団協力事業所制

度を実施したい。いわば地域の防災をやはり今までは消防署に全部任せていたのですが、それだけでは必ずしも十分ではありあません。きめ細い防災の組織が必要なのですが、なかなか今、消防団に入り手がいないのですね。じゃあ、ということいろいろ考えたのが企業がそこで消防団を組織してもらおうといったこともここで書かせていただいております。最後に、“心地よい定住環境のあるまちづくり”のところですね、甘利山の自然環境保全、市民団体による甘利山の草刈ボランティアが行われていますと、これも実は既に、市とですね甘利山倶楽部、あるいはそれ以外の方々いろいろなボランティア組織で活動しております。後ほど甘利山倶楽部の方がパネリストとして参加されますので、またその方から細かいお話は出ると思いますが、そんなことですね、いろいろな形で実は既に行われていることとこれから実施していこうという、いわば協働という形をですねこの長期総合計画の中に全項目のところに該当することを加えていております。ですからそういう面ではおそらく県内でも、あるいは県外でもこういった中身まで書いてあるのはまだ私はないだろうと、そういう意味で少しでも皆さんにそんなもの作ったかということですね、ご理解いただければありがたいなと思っております。さて、ここに書いてありますように“協働ってなに？”と、実はね、言葉で言うほどやさしくないんですね。私たちの年齢は、協働って言うとすぐに共に同じとかあるいは協力の協に同じとか、協同組合の協同とか、そういう言葉がすぐ頭の中にインプットされてしまっているのですね。頭の中に入っちゃってます。協働、協力の協に働く、これ何ですかいって、いうふうに思われる方がほとんどだと思います。私もですね、今から7・8年前に初めてこの協働って言葉を知りました。新しいんですよ。本当にここ3・4年ぐらいからぐーっとこの言葉が使われるようになりました。特に、去年の暮れあたりから例のリーマンブラザーズの関係で、世の中が一変しました。もう各自自治体は財政、財政、財政不足ということですから困って来ました。もう一つはですね、地域の高齢化、もう地方に行きますとですね、後期高齢者、前期高齢者も含めてですね、60%、70%、中山間地域になりますと若い人は出て行ってしまっ、もう赤ちゃんの泣き声さえ聞かえない、という日本はここ数年で劇的に変わってしまいました。そうすると、財源が無い、それから地域でお互いに助ける組織もできない、要するに限界集落ということですね。何も集落だけでなく、いまや商店街も限界商店街と言われるほど落ち込んでしまっている。さあ、これどうしようかと、みんな頭を痛めているのですね。どうしたら良いのかと。その一つの切り札、一つの解決策としてこの協働をやっ、いこうじゃないかと、今まではお金もありました、それからスタッフも市内の中、あるいは村部の中でも農村地域でも働き手となる方々がおられました。先ほどの消防団のように。ある意味ではお金で解決できたんですよ。ところがお金が無い、人手が無い。人手というのは実際にそうしたことをやっ、くださる人がいない、もうダブルパンチなんですよ。それならどうするかと。ともかくお金が無い、人手が無い、そうした中でどうやってやっ、いこうかということで協働って言葉が本当に3・4年前、特に去年の後半から急激に世の中のニーズにその言葉が使われるようになりました。今年の年頭の各市町村の首長さんが年頭のあいさつに大体書いてあります。どこか見れば協働によってまちづくりを進めたいなんて必ずほとんどのところの行政が入っています。じゃあ一体何ってところなのですが、私の言葉は一つ簡単です。要はお互いにですね、持っている力を出し合いましょう、それは別に若い人だけではなくてシニアの方も同様なのですね。地域にいますとですね、悪いのですが男の人はあまり出てこないんですよ。不思議に地方に行きますと元気のあるのはおばちゃんなのです。おばちゃんパワーです。ですから私は、別に男性は出てこないってよりもそういうことの必要性がなかったんです。それはなぜかと言うと、地域にあまりいなかった、どちらかと言うと外で働いていた。その方々がどちらかと言うと地元に戻るかなんかしている。特に、東京近郊はそういう傾向がすごく強いのです。あそこの家も定年になった、旦那さん毎日いるな。ということがだんだんだんだんわかってくるのですよ。そういうふうになった時に、じゃあおばちゃんパワーとシニアになった方で能力のある方はたくさんいられるのです。そうした方々も今度は一緒になって仕事をしてもらおう、仕事という言葉が良いかはわかりませんが、そういうことでやっ、頂こう、もっとわかりやすく言いますと、今地方で困っていることは先ほど申し上げましたように、独居老人なのです。特に男の人が一人で住んでいる場合ですね。わからないんですよ。この人ちゃんと食事しているのかどうか、それで私は九州に前にいたときに、こんなことがありました。九州でですね、元気なおばちゃんたちが学校が廃校になりました。学校がもう子どもが数少なくなっ、給食室が空いている、そこでですね、おばちゃん達がお弁当を作っ、それを旦那さん車で配達する、1食500円。500円のお金を持って配達するのです。普通、街中の宅配お弁当やさんはプラスチックのケースで配達されますよね。もう片道なのです

よ。ところがその九州、そこに行きますと、きれいな漆塗りのお弁当箱を使っているのですよ。なぜかと言いますと、回収しなくてはいけないのですよ。届けに行って回収すると、そうするとそこに会話が生まれるわけですよ。お弁当おいしかったですかとか。うまかったよとか。おじいちゃん何かほかに用事ありませんかという会話があると、この家はちゃんと元気だというのがわかるのですね。これはごくありふれたことなのです。これが私は協働だと思うのです。何が協働かと言うと、おばちゃん達が地元の地場産品を使って学校の給食室を借りるわけですよ。ここなのです。これが自分達で給食をする施設を造るとしたらお金もかかりますよね、中の厨房器具も必要になりますね。けれども空いている学校の給食室を使うことによってそこで協働が生まれるのですよ。行政と民間が組んで。お弁当を届けるおじいちゃんも喜ぶのですよ。3者が一両損じゃなくて一両得ですよ。行政だってそういう細かい手が回らないお弁当を1個配達する業者が地方にはいないのですよ。都会はいますよ。そうしたことが私は協働の一つのパターンだと思います。なぜ協働が必要かと言いますと、先ほど申したように財政の問題ですね。それからもう一つはやっぱり地域の皆さんに力を発揮してもらいたい、先ほど申し上げたように男の人は自宅にこもると朝昼晩家にいてですね、そしてお母ちゃんに風呂、飯、寝るって言うわけですよ。そうすると女の方は今までいなかったお父ちゃんが帰ってきて風呂、飯、寝るっていうのはものすごく苦痛なのです。そうした時に、はい父ちゃん出番ですよ、お弁当できたら届けてと言うと父ちゃんはよしこれはやっぱり自分がやらなきゃと仕事をすることによって、たとえ自給が100円か200円かその程度でしょうね。私ははっきりはわかりません。やっぱりそこが生きがいなのです。仕事があるわけなのです。人に届けておじいちゃん、おばあちゃんが喜んでうれしそうな顔を見ると、そこで会話が生まれて、このじいちゃん自分がパイプ役になっているのだと感ずることが大事な役目ではないかと思っております。時間がだいぶ過ぎましたので、端折ってまいります。要はですね、私たちはいろんなことができるのですよ。ただ、やらないだけなのです。だからそういう場所をこれから作っていききたいというふうに思っています。レジュメの中に有名な事例の中で、福島県矢祭町の図書館を造ったという話が出てきます。私ももったいない図書館なんてすごいネーミングだと思います。あそこでもですねお金がないのです。矢祭町っていうのは時々、国に反発して話題になっているのですが、その前の町長さんが、やっぱり図書館が必要だと、これは住民の皆さんのニーズですね。それに応えたいけれどお金がないと、建物を建てて図書を買うお金がないと、じゃあ建物は体育館を転用しようと、図書は全国から無料で送ってもらいたいと、しかも料金元払いで送ってもらおうと、そしてなんと50万冊以上集まってしまった。山の山ですね。それを地元の町民が私たちがそれを整理してですね、ちゃんと分類してダブっているものは除いて棚に陳列してちゃんと貸し出しできるようなラベルを付けたりした。これなのですよ。行政と民間そしてさらに事業所が必要なんです。事業所というと皆さんは会社と思うかもしれませんが、それは会社もあります。それから組合、何とか何とか協同組合、農協の組合もあれば商店街の組合もあればいろんな組合があります。そういった組合と組むと。これもやっぱり協働なのです。ですから、市民、市民団体、それから事業所、それから行政、こういったところがいろんな組み合わせをするわけです。中には市民団体同士と一緒に事業をする、これも協働なのです。だからそういうことで今まではできにくかったこと、自分一人ではできにくかったことをですね他の力、他のところと一緒にパートナーを組むことによって市民の皆さんの課題を解決できる、先ほど申しました地方だとお弁当を届けてくれない、安否を確認できない、と言うときに民間が学校の給食室を使ってお弁当を届ける、これは立派な協働なんです、ということなんです。ですからレジュメの中に書きましたように山梨市だと駅前の広場、本当に駅を降りたすぐそばにちょっとしたモニュメントがあって空き地があるんですよ。そこを朝市の会の人たちが市から借りましてそこで日曜日の朝、地元の方々が作った野菜だとかお惣菜だとか、そういったものを並べてそれを販売する。夏になると夕市をそこでやる。ただそこで夕市だけだと面白くないから音楽のコンサートなんかをやって皆さんがそこで楽しむ。こういうことだって立派な協働なのです。そんなことをですね是非是非これからですね、いきなり大きなことをやるというわけには参りません、ともかく小さなことを積み上げていく、そうすると市民の皆さんの意識が変わると思います。それからもう一つ、やっぱり仕事をしていくにはそういった団体が能力をつけていかなければいけない。今までのように単なるやればいっていいのでなく、少しずつレベルアップをしていこうと、その団体も大きくなっていかなければいけない、そ



して中身も充実していかなければいけないということですね、どんどん皆さんが目覚めるんじゃないかという気がいたしております。私は実は南アルプス市というところも応援しております。この協働についてです。それから山梨市のほうも協働を応援しております。山梨市は今年の3月に方針を作りました。それから南アルプス市はもう2年前に方針を作りました。今年の4月から“みんなでまちづくり課”という課を発足しました。そういう面では私はこの韮崎市はまだ階段1.5段くらいかな、それから山梨市はまだ階段1段目くらいかな、そこへいくと南アルプス市はもう階段3段目ちょっとくらいまでいったかなと、そんな気がいたしております。まだまだ皆さんそんなに大きな差はありません。要はこれからどれだけ取り組んでいくのか、是非是非、今日をスタートとして皆さんの中で協働についてもっと勉強してみようじゃないかと、いろんなことをですね、是非これからですね市のほうに投げかけていただきたいのです。そうすれば市のほうも、じゃあみんなで勉強会をやりましょうとか、あるいはどこかに見学会に行きましょうとか、あるいは他の地域のNPOだとかいろんな団体の人と討論会と言いますか研修会と言いますかそういうものをやりましょうとかいろんなことでですね勉強の場が私は生まれてくるだろうとこんなふうに思っております。全ては今日が始まりです。そんなわけですから是非是非、皆さんと一緒に今日を機会に、この韮崎市の中で市民がつくるまちづくりというものを始めていきたいなとそんなふうに思っております。後がずーっと控えておりますからちょっと早いのですがこれで私のつたないレポートを終わりにさせていただきます。この後また、パネルディスカッションがありますから是非その場で皆さんからの熱い思いを質問という形でも結構ですし意見という形でも結構ですからお寄せいただきたいとそんなふうに思っております。どうもありがとうございました。

(清水)

市原先生どうもありがとうございました。以上を持ちましてまちづくり講演会は終了とさせていただきます。市原先生本当にどうもありがとうございました。後半のパネルディスカッションにつきましては2時15分より始めさせていただきます。ここで10分間休憩といたします。

③パネルディスカッション ～協働でひろがる新たなまちづくり～

(司会者)

それでは時間になりましたので、これからパネルディスカッション「協働でひろがる新たなまちづくり」を始めさせていただきます。コーディネーターは先ほどご講演いただきました市原先生にお願いいたします。次に、パネリストの皆さまをご紹介します。今回のシンポジウム開催にあたり市民の代表として7名の方にパネリストをお願いいたしました。まず、子育てサークルピーターラビット 山本知恵様、韮崎市シニア健康サポーター 伊藤啓子様、甘利山倶楽部会長 清水一様、穂坂町ふるさと協議会会長 石川和仁様、NPO法人にらさき味噌汁学校代表理事 高木智朗様、韮崎市商工会青年部部長 山田七穂様、図書館ボランティアサークルポラン代表 小尾千秋様、そして横内公明韮崎市長です。各団体の活動内容につきましては、プログラムに載せてありますのでご覧ください。その中で1点訂正がございます。子育てサークルピーターラビットの活動場所についてですが、韮崎中央公民館とありますが、韮崎中央公園の誤りですので訂正をお願いします。それでは、ここからの進行は市原先生にお願いいたします。よろしくお願いたします。

(市原)

はい、承知いたしました。それではこれからちょっと長い時間ですが、始めさせていただきます。まず最初に、先ほど公務でご挨拶いただけませんでした横内市長さんからご挨拶をお願いいたします。

(市長)

皆さんこんにちは。市長の横内でございます。梨北農協の総代会がありまして、そちらのほうに行っておりましたので開会時にはご挨拶ができませんでした。本当に今日はお足元の悪い中、空席を除けば満杯の盛況でございまして、まあ、こういったかたい話はなかなか人を寄せるのは難しいのですけれども、多くの方にご参加いただきましてありがとうございます。ご存知だとは思いますが、



今日、コーディネーターをしていただく市原先生につきましては、昨年度、蕪崎市第6次長期総合計画を策定するにあたりまして審議会の会長さんをお努めいただいております、本当にお世話になったところであります。ありがとうございます。今回の計画の特色は、今日のシンポジウムのキーワードであります“協働”に踏み込んだところがございます。今後の蕪崎市のあり方として、単に行政がやるのではなく、市民、市民団体、事業者がお互いに責任、役割を分担して手を取り合いながらまちづくりを進めていきたいというふうに思っております。パネリストの皆さまにおかれましては、日ごろから各地区、各分野で実践している活動状況や忌憚のないご意見をいただき、会場の皆さんと一緒にまちづくりについて考えて参りたいと思っておりますのでよろしくどうかお願い申し上げます。以上であります。

(市原)

はい、ありがとうございます。それでは今日のパネリストの皆さまに自己紹介を兼ねまして簡単にご自分の団体、あるいはグループの紹介をお願いしたいと思います。勝手ですが、一人3分くらいでお願いします。では、一番向こう側の山本さんからずっとお願いいたします。

(山本)

子育てサークルピーターラビットからきました山本といいます。よろしく申し上げます。私どもの子育てサークルは竜岡町に住んでいる方たちを中心として、入園前の子どもとお母さんが一緒に活動しています。お母さんたちが作った遊びや季節の行事などを取り入れた遊びをやっております。暖かくなってくると、公園などに出かけて遊んだりもしています。主に竜岡公民館とか甘利児童センターなどを利用させていただいております。子どもたちの友だちを作るだけでなくお母さん同士の情報交換の場所として楽しく活動しています。よろしく申し上げます。

(市原)

はい、ありがとうございます。どうぞ皆さん、このグリーンの3ページ目に各団体の短いのですが紹介が載っておりますので、それもあわせてご覧いただきたいと思っております。それでは、伊藤さんお願いします。

(伊藤)

改めまして、蕪崎市シニア健康サポーターとして活動しております伊藤啓子と申します。よろしく申し上げます。私たちシニア健康サポーターとは、「いつまでも住み慣れた地域で元気に暮らしたい、そう望んでいる高齢者がより元気で過ごしていくためには、地域の力や若い世代の協力が必要です。健康づくりや介護予防活動の企画運営を行政とともにを行い、参加者が参加しやすいように身近で支援するサポーターの養成を行います。」という蕪崎市の呼びかけに応募して活動している者たちです。実際の活動は、行政が各地区で毎年開催しております“いきいき貯筋クラブ”、この貯筋の筋は、お金の金ではなくて筋力の筋ですが、そのお手伝い、会場設定とか受付、高齢者の方への配慮などを行っております。月2回、合計6回、外部の専門トレーナーの先生の指導のもとで開催されているわけですが、これが終了してしまいますと、折角、筋力トレーニングの必要に目覚めたお年寄りたちもなかなか習慣化してお家で自主的にトレーニングに励むという方は少ないわけです。そこで、サポーターが自主的に各地区の公民館などで“いきいき貯筋クラブ”を立ち上げて年間を通して活動を行っています。そのほかには高齢の方が地域のいろいろな行事に参加しやすいような環境づくりや声かけなど、介護予防サポート地区で行う介護予防への協力にも取り組んでおります。シニア健康サポーターの取り組みは平成18年度から始まりましたが、18年度はサポーターが29名、いきいき貯筋クラブ終了後の自主活動地区は4地区、19年度はサポーターが56名、自主活動地区は9地区、20年度はサポーターが58名、自主活動地区は蕪崎市全地区の12地区まで広がりを見せて、本当に生き生きとして活動しております。



(市原)

はい、ありがとうございます。それでは続きまして、清水さんお願いいたします。

(清水)

皆さん、こんにちは。今日は甘利山倶楽部という会の会長という肩書きでこのシンポジウムに参加をさせていただきます清水一でございます。よろしくお願いいたします。もう既に甘利山倶楽部の名前、活動等については多くの方もご承知のこととは存じますが、甘利山倶楽部は本当に皆さま方が知っているように、葦崎の一つの自然の財産であり、山紫水明の地葦崎においては一つの代表である甘利山、ちょうど今、もう間もなくですねレンゲツツジの開花の時期になります。そして、甘利山倶楽部がもともと発足したきっかけというのが、ちょうど今から6年位前にいつも例年当たり前のように咲いていたレンゲツツジがほとんどと言っていいほど花をつけなくなった。そして、その時に甘利山の頂上を見たときに、なんか身震いのするような感じをした。葦崎のこの宝である甘利山のツツジが今後こんなことで果たして良いのだろうか、何とかしてこれは残していかなければいけない、これが甘利山倶楽部の発足の本当のきっかけ、発端でございます。そういう中で、じゃあ何故咲かなくなったんだろうかということをしていろいろな形で調査をしたり調べたりしましたが、なかなか我々一人ひとりの考えや力では本当のところはわかりません。ましてや自然界が相手でございます。そういう中で、いろいろ研究をしたり、市へもお願いをしたりして一定の結論が生まれて、今、甘利山の自然、特にツツジとか草花とかを守っていくには、あの笹で覆われた、ミヤコ笹と言いますが、ミヤコ笹の草刈を中心としてツツジや草花を守っていくというというのが一番良い、ベターな方法であるということでもって、今日も計画をしておりましたが、春の草刈、秋の草刈、その間にはいろいろなことを研究をしたり、体験をしたりして何とか守っていくという活動をしております。幸い、市でもご理解をいただきまして昨年11月1日には大クリーン作戦ということで市長以下300名の方があの甘利山の山頂に集まっていただきまして、一大草刈クリーン大作戦をやったところでございます。これは1回で終るものではありませんが、今年もたぶん継続をしてやって頂けるということで、その中心となってやっています。なかなか、こういう会でございますので、会員は非常に広くから集まって頂いておりますけれども、なかなか定着をしてまとまって行動するということにはいきませんが頑張っていきたいと思っております。清水一でございます。よろしくお願いいたします。



(市原)

はい、ありがとうございます。続きまして石川さん、お願いいたします。

(石川)

皆さん、こんにちは。穂坂町ふるさと協議会の石川と申します。今、葦崎市に住んでいる方もこの地を離れた方もふるさとというものは誰しも大事にしているものと思っております。この組織は穂坂町民全員を対象にしまして、平成20年8月に設立総会をもって設立されました。山梨は宝石の産地ですので例えて言いますと、穂坂はダイヤモンドの原石だと考えています。まず、はじめにやったことは穂坂のダイヤモンドって一体何だということからスタートを切りました。穂坂は豊かな自然、農産物、それからそこに住んでいる人たちの知恵や経験や神社仏閣、それからお神楽等の伝統文化、様々なものがございます。これをいかにして活用していくかということの一つの課題として取り上げまして、じゃあどうするかということの中で、今までそのダイヤモンドを誰もさほど磨いてはきませんでした。それで、まずどこにダイヤモンドが埋まっているかという発掘から始めまして、それをブリリアンカットを施しましてやっと、光り輝くようなダイヤモンドが一つできあがりました。今週の21日に“ぶどううるヴァン穂坂”という赤の発泡性のワインを発表することができました。白とかロゼというのは世間に出回っていますので、その隙間を狙ってですね無いものを作っていく。それから今までの農家というのは、作ったものをそのまま売ると、作ることはプロでも売るとはプロではないと、それで我々の発想は作ったものを加工して我々の手で売っていくと、そして農家収入の底上げを図っていくということ、まずはワインの発売から始めます。これからですね、先日も4月14日に穂坂町の柳平という地区でお神楽の舞いがYBS等で放送されたわけなのですが、まず部会を作りまして、ものを作る部会、観光の部会、それから穂坂の公園に千本桜を植えようではないかということで桜の部会、それから伝統文化を

いかにPRしていくかという研究する部会、まずそれを立ち上げまして、2年目のスタートを切りました。そんなことで、いかに数多くのダイヤモンドを磨いていくかというのがこれからの穂坂町ふるさと協議会の課題かというふうに考えています。以上でございます。

(市原)

はい、ありがとうございました。続きまして高木さんお願いいたします。

(高木)

にらさき味噌汁学校は、現在味噌と味噌汁に関するまちおこし活動をしております。味噌に関する知識の普及とか味噌を利用した商品開発とか販売を行っております。現在、味噌汁学校という商品名と武田の里という甲州味噌、それから味噌汁クッキーなどが開発、販売しております。実際には19年の4月に団体を竜岡町で立ち上げまして、最初の1年間はエコパーク竜岡の中のコミュニティセンターを会場にして1年間毎月1回、毎回3時間ずつセミナーを開催してきました。そして20年3月に韮崎市商店街空き店舗対策事業第1号認定事業所として4月には本町一丁目にバーバラハウス99生鮮コンビニ&味噌汁カフェという店を開店してその年に韮崎文化村を会場にして大人の食育、それから保健センターを会場にして一流ホテルのシェフに学ぶ味噌料理教室ということを開催しております。そして現在、新しい仮の名称なんですけど、あひる市の開催とかを計画中で現在に至っております。

(市原)

はい、ありがとうございました。続きまして山田さんお願いいたします。

(山田)

韮崎市商工会青年部部長 山田と言います。よろしくお願ひいたします。今日参加の他の方々は会長さんといった形ですけども、本来ならばですね商工会の会長が来るべきなんだろうかなと思いますけれども、若手の視点からというところで今回これに参加させて頂きました。まず、私たちの活動内容等を報告させて頂きます。私たち商工会青年部は市内の若手経営者、また、後継者で構成されておる団体で、現在、21名で活動しております。それぞれ業種は異なりますけれども、自分の事業所発展のためには個々の経営努力というものもありますけれども地元韮崎を元気にするという観点から魅力あるまちづくりをテーマのもとに地域活性化のために様々な活動しております。具体的な活動といたしましては、過去におきましてですけど、よさこいソーランまつりを立ち上げました札幌市商工会のほうへ研修に行かせていただき、韮崎のみこしまつりINにらさきの立ち上げの参考とさせて頂きました。現在このお祭りは韮崎の夏祭りの風物詩として定着しつつあるお祭りになってきていると思います。また、平成19年度ですけども、当地域でも関心の高かった企業立地をテーマにして、宮城県の企業誘致担当者の話を聞いたり、県内製造業の動向について朝日新聞社甲府総局の記者の方による講演会を開催いたしました。また、観光や仕事で韮崎を訪れた人たちが「飲食店どこにあるの？」という声が非常に多かったものですので、全部とは言い切れませんが、主だった飲食店が紹介できるようなマップを製作いたしました。また、平成20年度におきましては、地域ブランドの開発という視点から、韮崎市の名称の韮に注目して、にらによる特産品を開発を目指しました。これはご当地グルメで成功している静岡県裾野市の裾野餃子クラブを訪れ、商品の開発、また販売について様々な意見を聞かせていただきました。また、富士宮やきそば学会会長を講師に招きまして“B級ご当地グルメの地域ブランド化とそのポテンシャルティ”というテーマで講演会を開催いたしました。また、様々なイベントを盛り上げるために市制祭、みこしまつり、花火大会等様々なイベントに参加協力してイベントを盛り上げております。また、世間では不況の風が吹き荒れておりますけれども、そういう時だからこそ積極的にいろいろなことに参加していこうというので私たちは日ごろ活動している団体です。よろしくお願ひいたします。



(市原)

はい、ありがとうございました。それではパネリスト最後の小尾さんお願いいたします。

(小尾)

こんにちは。私は蕪崎市立図書館付けのボランティアサークルで活動しておりますボランの小尾と申します。本日はよろしくお願ひいたします。私たちの活動内容といいますか発足のきっかけは、子どもを通して知り合ったお母さんたち7名で活動しています。仲間のうちの2名が当初、隣のまちの当時双葉町の図書館のほうでボランティアをしまして、そういえば蕪崎市のほうの図書館にはグループで活動しているボランティアが無いね、ということで折角だから住んでいるまちに何か協力できればということで、図書館のほうに申し出て活動がスタートしたグループで、今年で12年目を迎えます。主な活動内容としましては、蕪崎市の図書館付けですので、図書館のほうの活動が主なのですが、毎年6月にあります図書館まつり、12月のクリスマス会、あとは毎月第4土曜日の午前中に行っております、今日も午前中あったんですけれど、お話し会をしております。あとは中央公民館の出前講座のお話をいただいて、市内の保育園、幼稚園、児童センター、あとはあけぼのの支援学校のほうにも出かけています。あとは、活動を広げることで、市内はもとより市外の小学校、保育園のほうからもお話をいただいて、出張して公演をしています。今日もご一緒しているのですが、子育てサークルピーターラビットさんのほうにもお話をいただいて、読み聞かせをしたりしています。あと、図書館まつりとクリスマス会には児童書や絵本などを参考にして自分たちで手作りのものを大型の絵本や人形劇に作り変えたり、大型のパネルシアターで演じたりしています。対象として園児さん、子どもさんはお母さんの膝の上にいる赤ちゃんから小学校3年生くらいまでの子どもさんの読み聞かせということで、市内の小学校のほうにも春と秋にあります読書週間に呼ばれて1年生から3年生、時には高学年のほうにも入るのですが、活動の場を広げています。自分たちの子どもが小さかった頃には、わりと私たちも自分の自由になる時間があつたので、とても精力的な活動を続けてこられたのですが、ここのところちょっとみんなが働き出してしまったということで、活動がちょっと先細りになって寂しいのですが、図書館のボランティアでグループで活動しているのが私たちだけなので、是非別のグループの立ち上げにも協力したいなと思っています。よろしくお願ひします。

(市原)

はい、ありがとうございました。お聞きのように7つのグループ、団体のそれぞれの方からご自分の活動内容をご報告いただいたわけでございます。時間が今、2時42・3分で、さっき3分程度でお願いいたしますと言いましたが、大体3分程度なのですよ。ありがたいのですよ、こういう時は。それでは、2巡目を参りたいと思います。実は今日のテーマは“協働”ということで皆さんにご理解いただきたいのが狙いでありまして。いったい“協働”って何、と聞いただけではなかなかわかりにくいというふうに申し上げました。ということで、“協働”は市民、市民団体、それから事業所、事業者と言ったほうが良いでしょうね、それから行政、この組み合わせですねいろんな活動をしていくということをお願いしました。それでこれからですね、各グループ、団体の方に私のところはこういうことで協働しています。それを皆さんにわかるようにちょっとご説明いただけませんか。これが協働なんですと。ということで事例紹介を、またすみませんが一番向こうの山本さんのほうからお願ひいたします。

(山本)

私たちの子育てサークルでは、地域にある竜岡町の公民館を利用して頂いております、月に1回から2回位、甘利小学校の近くに児童センターがあるので、そちらの行事に参加させて頂いて地域の場所を利用して楽しく活動しています。これからは場所だけではなくて、蕪崎市には他にいくつか子育てサークルがあると思うので、そちらのサークルの方たちと交流を深めたり、小さい子だけの活動でなくて、少し大きいお兄ちゃんお姉ちゃんやおじいちゃんおばあちゃんなどの交流ができればいいなということを考えています。まだ、こちらのほうは計画だけなのですが実現できればいいなと思います。



(市原)

ありがとうございました。そういう形で子育てサークルの皆さんはやっていらっしゃるそうです。それでは続いて先ほど話も出ましたが、伊藤さんのほうからシニア健康サポーターの活動について、こういう形で協働しているんですよということをもう一度お願いいたします。

(伊藤)

私はこのシニア健康サポーターに19年度から参加させて頂いているのですが、保健福祉センターの保健師さんたちの熱意が素晴らしいですね。それで、「あなただってできるよ」と言うような保健福祉センターの保健師さんたちの声に後押しされて、私は入れていただいたのですが、サポーターのほとんどが65歳以上なのです。私たちもいわゆる高齢者です。みんな本当に70歳以上の方もいらっしゃるし、お年寄りに筋力体操を教えるとかやっていただくのですが、自分たちがもう一緒になって体操をして元気でいようというそういう気持ちで皆さんやっていらっしゃいます。私たちが80歳、90歳になった時に、介護を必要とすることなく自立して生き生きとした老人であろうねっていうのがいつも会うとそういう掛け声でやっていますね。それから、いきいき貯筋クラブに参加されている方の中でも80歳を越えていらっしゃる方も大勢いらっしゃるんですけども、その方が私たちにパワーをくださるように毎日私はこのように体操をしているよとか、毎日歩いているよという方がいらっしゃって反対に私たちが教えていただくようなこともいっぱいあるわけですね。このシニア健康サポーターになって本当に良かったなと私自身は思っています。そんなふうで、私は中田町に住んでいるのですが、中田町でも月2回、第1第3の火曜日の午前中に公民館をお借りして開催しているのですが、なかなか農閑期では参加者が多いのですが、農業が忙しい時期になりますと参加者が非常に少なくなってしまいうですね。でも、継続は力なりと思っていまして、一人になってもやるよ、という意気込みで年間を通して活動しています。

(市原)

はい、ありがとうございました。先ほど活動紹介のところでは行政と相当な関係でこのサポータークラブがあるということ私にはちょっと感じたところがございます。それでは、もう一度清水さんのほうから再度、先ほど11月1日の話も出ましたが、それもちょっと含めてもう一度どういう形の協働なのかを皆さんにご説明をお願いしたいと思います。

(清水)

はい、今日のテーマであります“協働”という言葉はまさしく甘利山倶楽部の活動につけていただいたようなお名前であるといっても過言ではありません。と言うのはまず、甘利山の自然あるいはレンゲツツジを守っていくためには、やはり私たちの倶楽部のメンバーがたくさん増えてはきてはいますけど、あの広大な自然の中においては、本当にわずかな存在でしかありません。したがって、いろんな人の協力を得て、共にこの事業を働いていかなければできない事業である、基本的にはまずそういうことが言えるのではないかと思います。そういう意味で先ほどもご挨拶の中でちょっと申し上げましたけれども何にも規制はございません、私たちの倶楽部へ入っていただくには、まさしくあの自然を守っていく、美しさを無くしてはいけません、といった本当に即時的な感覚で思っていた人に入っているわけですから非常に広範囲で何もこう入りやすいわけですが、さあ、ところでこの事業をやっていくには本当に今日も春の草刈の日程になっていたんですけど、雨が降って天候が悪いということでもって今日は中止にしました。そういうふうには一方では自然を相手に時期的にもこういう時期にこういうことをやらなければならないということもありまして、なかなかたくさんの人手がいる事業にもかかわらず、なかなかこうそういう規制がありますので、たくさんの人手を具体的に実践していくのは難しい現実もございます。そういう中で、とにかくまあ、これは甘利山というところへ何回も行った方もあると思いますが、意外と地元にお住まいしているにも関わらず、知らない方も結構多ございまして、とにかくまあこういうことは目で見て体で感じていただく、現実を見ていただくということが一番手っ取り早いし、早いのではないかといいこともありまして、それとまあ物理的に人手がいるということでもって何とかいろんな団体とかいろいろな企業とか、私たちの可能な限りのところへ声をかけましたり、要はこの一番肝心の市長がおいでになりますけど、韮崎市でもやっぱり市として韮崎市の持ってい

る宝を先頭に立ってリーダーシップをとっていただいて、市の一大事業としてやっていただくことが、この葦崎の自然を守り宝を守っていくことにもつながるんだろうということで大いに働きかけをいたしましたところ、市でも大変ご理解をいただいて、その結果として団体的にはいろんなライオンズクラブとかロータリークラブとかありますけれど、いろんな団体の方が参加していただいて総勢300人という規模でお天気にも恵まれましたし、若干このしんどかったという反省もありましたけれど、いろんな年齢的にも若い方から結構の年配の方まで300の方が集まって頂いて、草刈をやっていただいた。全体の構想からいきますと、まだまだ足りなかったんですけど、我々が日ごろやっていることから見ますとやっぱり人の力は大きいな、300人の力はこんなにも広い範囲を変えたんだなという感じがいたしましたし、また、あのいろいろな方々から反省とかその時の模様をお聞きしましたけれど、お弁当がおいしかったとか、やっぱり自然はいいねとかというお答えをいただきまして、大いにこれからまた会の活動の励みになったところでもございます。そんな形で今、自然環境の問題も言われておられて企業の方をちょっと我々とは関わり方が微妙に違うところがあるのですが、何とかの森とかという形で企業も大いに自然保護とかいうことにも関わっています。ですからこれからの課題といたしましては、そういう企業さんともこういう形でやっていくことに協力していただきたいお互いに考えをぶつけ合って、甘利山を守っていく、自然を守っていくという事業にどんどん参加していただきたいというふうな考え方も持っているところでございます。そんなところでこの協働という言葉は本当に甘利山を守っていくうえにも皆さん方のいろんな、多くの人たちの力が必要だということでこれまでの昨年11月1日の大クリーン作戦についてはこんな経過でこんなふうに行われてきたという話をさせていただきまして、今のコーディネーターの先生からの問題提起といいますか、お答えになったかわかりませんが、お答えとさせていただきます。

(市原)

はい、ありがとうございます。この甘利山倶楽部もですね自分たちだけでやっていたのだけでは広がりがありません。そこで市長さんをはじめ市民の皆さんがバックアップして先ほどの300人という数字が私は出たんだろうというふうに思っております。それではお隣の石川さんお願いいたします。協働の内容についてお願いいたします。

(石川)

今日はですね、葦崎市第6次長期総合計画策定記念ということでこれにちょっと即しますと、このパンフレットの基本方向4「魅力あふれるまちづくり」、単純にですね魅力があふれるまちづくりをしようと、あふれると言うことは魅力がたくさんあるということですね、じゃあ魅力って何だろうって、葦崎市の夏祭りになるとですね、皆さん何かワクワクしてお祭りに行ってみようという気になりませんか。例えば、まちを歩いていて何かいいなっていう時には何か魅力があるんですよ。その時にはですね、もっと深く考えた時に、やっている人たちが楽しくなくっちゃいけないというふうに私は考えます。我々のまちづくりもやっている人が楽しく、やはり夢を語り合ってください、ああしようと言うそういう語らいの中でまちづくりをしていかないと全然面白くないと、だから端から見ている人も魅力を感じないということではないかと思うんですね。そんなことで、あと農産物のブランド化ということも意識しましてブランドのロゴマークが製作されました。“ぶどううるヴァン穂坂”、ぶどううるというのは日本語ですからぶどうを売ると、たくさん買ってくださいよという単純な言葉とですね、インドネシアのジャワ語で丘、穂坂は丘ですので二つを掛け合わせた言葉、“ヴァン穂坂”ヴァンはワインということでやはり昔から穂坂はぶどう作りが盛んな地域だったので、それを一つのロゴマークとしまして、その共通のロゴマークのほかに各農家のロゴマークを作っていこうと、今回ですね作ったヴァン穂坂の赤の発泡性のワインはその第一人者である保坂耕さんのぶどうを仕込んで作りましたので、保坂耕、耕すということで三つ葉というロゴマークが今回完成しております。ですから違う人が作るものは下の三つ葉が何になるんでしょうね。形が変わってきます。ですからそういう細かいところも楽しみながら見ていただければと思うのですが、今考えているのは、第2弾として昔からの地域の方々がジャムを作っていますので、そのジャムなんですけれども、昔手書



きの色鉛筆で塗ったような感じだったので、まずピンとかデザイン化とかということを考えて、ワインもおらんとうのワインとかで作ったワインもあるのですが、やはり流通ということを考えますとどこに流通させるかということによってやはりイメージというものも違ってきますし、この近辺で売る分だとそれなりのもので良いのでしょうか、例えば都心のデパートとかそういう高級志向、例えば原宿のフランス料理店とかイタリア料理店とか芸能人が通うようなお店とかとなるとそれなりのブランド力を持ったデザインが必要になってきます。この協働ということを考えて場合に、今まで穂坂の人たちというのは知恵も経験もあります。結束力も非常に強いです。ただ、先ほど私が申しましたようにダイヤモンドの原石を磨くにはやはり優れた機械が必要です。その機械がですね、今回市長をはじめとして副市長は以前、観光のお仕事をされていまして、そういう実践的なアドバイスとか江戸川大学の鈴木教授のアドバイスとか、それからフードコーディネーターの奥村さんのアドバイスとかデザイナーの三木さんの力とかそういうものを全て結集してはじめてできたのがこの“ヴァン穂坂”というワインなので、ですから、協働という字を見ていただくと協力して働くという字が書いてあります。その言葉の中に皆さんの力が一つ一つの力が集結してはじめて出た作品なので、ですから、こういう行政との協働がなければ今回、この作品は誕生してきませんでした。我々穂坂の人間にとっては、この協働作業というものが非常にベクトルを同じにして良いものができるなというふうに思っております。それからデザインをするのにも、お金がかかります。この会はお金がありません。じゃあどうするかという、もともとの前提が農林水産省の助成金を使ってみようじゃないかというところから出発しまして、昨年の8月に組織を立ち上げました。私も農水省のほうに行ったのですが、やはり助成金となると非常に大変ですね。このくらい分厚い資料を2時間位で説明して質問に答えよと、なかなか非常に難しいです。各自職業を持っていますので、それに集中専念することがなかなかできません。今ですね農林課の平賀富士夫課長をはじめとしまして、担当の井上さん、非常によくやってくれています。情熱的で私も頭が下がるくらい良くやってくれています。そういう人たちの力がなくなかなかこういうものというのはできないんじゃないかというふうに思います。我々ができるのは一つ一つ、一人一人のできる力を束ねて、それを如何に表現するか、如何にいいものを作り上げていくかというそのパワーですね。その磨くものは他の方の力を借りなければできませんので、そういう部分では協働というものは非常に素晴らしいものだと感じております。以上でございます。

(市原)

はい、ありがとうございます。ヴァン穂坂の誕生はですねやはり行政の協力があってできたということをお話されたと思っております。それでは、お隣の高木さんお願いいたします。

(高木)

にらさき味噌汁学校の発足はそもそも商工会の出る杭塾というのに参加したのが発足のきっかけであったのですが、私ども活動の計画当初から今で言う協働というか、そういうものをイメージして計画を立ててきました。私たちは協働ということに対しまして、トライアングルと言うか具体的には三輪車をイメージして取り組んでおります。三輪車というのは方向性とか推進を図るのが前輪であって、三輪車の本体と推進の安定を図る後輪2つがあるわけですが、前輪は事業主体となるグループなり団体ということですね、それから後輪のほうの一つは行政であり、もう一つは地域だとか企業だとか学校



だとかそういうことになろうかと思っております。そういうことで私どもは三者といいますか、そういった三要素をもとにして計画を立ててきました。最初の味噌汁学校を立ち上げた当初のセミナーは、県内の味噌メーカーさんの方を講師に呼んだり、地元の山梨県立大学の市原先生だとか山梨大学の先生だとかそれから地元の料理教室の先生だとか、そういう方に講師としておいていただいて推進してきました。2年目になりまして、空き店舗対策の時に行政から空き店舗対策事業ということで、支援をしていただくとともに、生鮮コンビニという営業といいますか運営の方向性も一応アドバイスをいただきました。それで、その時始めました大人の食育講座というものは、これは前編、山梨学院大学の食物料の教授たちに全部お願いしました。それからもう一つのまちおこし実践担い手教室というのは、これは市原先生が座長となって頂いて、各よそのNPOの方々とかのお話をうかがいました。そんなよう

なことで、私たちは常に協働と言いますか、協働というのは行政とのつながりばかりでなく、地元の企業だとか大学、学校、地域の皆さん、こういったところとのつながりで一緒にやっというのが協働だと思っております。

(市原)

はい、ありがとうございました。協働の範囲も広いんだということが高木さんはおっしゃったと思っております。それでは、商工会もいろんな活動をされておられますので、そのへんのことも踏まえて山田さんお願いします。

(山田)

私、実は勉強不足でありまして、この協働っていう言葉がつい最近知ることになったわけでありまして。ですけれども、この協働っていう内容の意味を見えますと商工会の活動自体が既に協働なんではないかというような感じがいたします。個人では何もできなすけれども、商工会という組織の中で入っていろいろな事業を展開していく、これがまあ協働と本来言うのかわかりませんが、自分はそうだと思っております。あとですね、どういう活動をしてきたかと言いますと、先ほども活動内容でお話したと思っておりますけれども、みこしまつり I Nにらさき、これは若宮の神社の一つの夏の例大祭のお祭りでした、元は。これがですね、あまりお客さんが来なくなった時、商工会の青年部で盛り上げていこうじゃないかという話が出たときに、まだ私は商工会に入った間もない時でしたので、何で氏子のお祭りと商工会のっていう感じがしました。けれども、紆余曲折を経ながら、何年かやっといううちにかなりの人が集まってくれるようになりました。もともとは本当に地元の青年部の人たちがみこしを持ち寄って参加した祭りですけれども、最終的には各企業、また団体、学校等参加してくれて多いときで500から600人が参加するようになりました。そうなるくと、商工会としても折角ここまで人が集まっているのだったらもったいないのではないかというような話になりまして、露天商のブースとはまた違うブースで商工会としてのイベント等をして、その商工会に加盟している商店の皆さんのPRの場所にできるようなお祭りとなってきました。そういうふうなところを見ていくと、ああ、やっという良かったのかなと、もともとは商工会と違うような活動じゃあないかなと思っただけですけれども、やっしてみれば結構地元の今まで露天商にしかお金が落ちなかったやつが、こうやっという地元の商店街に少しでもお金が落ちるようになってきたというへんがやっという良かったなと思っます。また、これも青年部としては手に終えないくらいのお祭りとなくなってきましたので、実行委員会等を立ち上げてこれからますます大きくなっていくお祭りではないかと思っます。また、花火大会なのですけれども、この花火大会、やはりこれも商工会、もともとは商工会でやっというのですけれども、行政のほうに協力をお願いして行政と商工会とでやっというのですけれども、商工会として寄付をしております。その中で、ただ寄付をしてお祭りをやるだけでは全然商店街のあれにならないじゃあないかということで、当初は青年部だけなのですけれどもお祭りの的屋さんの中に店を出して、商工会の青年部というところへんでPRをしてきたのですが、だんだんだんだんそれも商工会の中で浸透してきて、あのお祭りに出るのにはどうしたら良いのですか、といった質問がきて、今ではまだ5、6軒ですけれどもその地元の名物を販売しているお店のPRの場と今なっってきております。いずれにしても、先ほど活動内容についてのお話をしたのですが、こんなご時勢だから何もできないよ、って言っというたらだんだんだん気持ちがネガティブになってきます。こういう時代だからこそ、いろいろな活動をしていき、下手な鉄砲も数打ちや当たるではないですが、いろいろやっという中で本当に自分たちの商売また、葦崎の発展のために有効になっていくというようなイベント等を手がけていきたいなと思っしております。以上です。

(市原)

はい、ありがとうございました。花火大会というのも関係されるというのを私、今日知った次第でございます。さて、最後のグループとしてもう一度、小尾さんのほうからお願いしたいと思います。先ほどはかなりお話されたと思うのですが、もうちょっとお願いいたします。

(小尾)

重複するところがあるかもしれませんが、私たちが活動するにあたって、とても図書館の方とか中央

公民館の方たちにはとても良い環境を与えていただいて、私たち活動をする事ができています。今、より多面的なサービスが求められていて、地域の図書館が何を準備し、市の全体の情報化とか学習機能の充実がすごく求められている時代だと思うのですね。生涯学習社会におけるボランティアのあり方を考えていくうえで、図書館ボランティアの組織化というのも図書館の大きな役割の一つだと考えています。その図書館を拠点としたボランティアグループの結成の呼びかけも私たちは12年間やってきた中で多少のノウハウもあつたりするので、後進の育成もしていけたらいいなという事は考えています。具体的な協働活動としましては、先ほども話しましたように中央公民館のほうへボランティア登録を私たちはしております。中央公民館のほうに市民の皆さんからお話し会に来てくださいますとか、こういう団体いませんか、といったお話が中央公民館のほうにあって、それに当てはまる団体に話がいくわけですね。私たちは子ども向けの話をしているので、そういった幼稚園や保育園からの要請に応える形で中央公民館のほうから、ポランさんこんな話に来てますが行ってもらえますか、というような形で活動をしています。それは協働活動の一つですよ。先ほども言ったように県内には各市町村にこういったボランティア活動をしているグループが葦崎は本当に少なくてもあれなのですけれども、たくさんのボランティアサークルを抱えている図書館なんか数が多くあって、その県内の図書館ボランティアで作る勉強会なんか年何回か催されていて、とても専門的な話し方、声の発声のお勉強からもさせてもらえるような講座が開かれていたりします。あと、これからやっていきたいなと考える中ではやっぱり葦崎市はその障がい者へのサービスをしているボランティア、読み聞かせにしても出張してテープにおこしてそれを渡している活動をされている方とかほかの図書館にはいらっしやるのですけれども、葦崎市にはまだそれが無いので、いろんな人材の方が、シルバーとかの方で登録されている方がいらっしやると思うんですね。そういった方たちにも是非、力を貸していただいて図書館の活動を充実したものにしていききたいなと思っています。

(市原)

はい、ありがとうございます。図書館のボランティア活動というのは各地でいろんな形で協力している姿を私は見ております。さて、2巡目が終わりました。大変皆さん時間を良く守っていただいております、私もちょっと気分的にはすごく今、いい状態にあります。さて、引き続きまして、皆さんに私のほうからちょっと質問をさせていただきたいと思っております。実は、先ほどの中で甘利山のことが気になったんですね。気になったというのはおかしいのですが、今はいいと思うのですが、さらにですね、やはり草刈とか大変なことだと思うんですね。私は企業の方も本当は入ってもらいたいなという気はしているのですが、そのへんも問題もあると思っております。どうも現場の方々としては来る人を拒まず、去る人を追わずというわけではなく、皆さんと一緒に認識に立ってスタートしないとまずい、ということもたぶんあるかと思うので、そのへんも含めてちょっともう一度、清水さんのほうから今後の活動も含めてお話していただけますか。お願いいたします。



(清水)

今まで2度発言する機会がありましたけれども、一応大雑把に甘利山クラブでやっている活動と甘利山の現状をお話しました。ここへ至るまでにはいろいろな問題がありました。そして、これからのいろんな問題はクリアーをしていかなければならない、こんなふうには基本的には思っております。その一つといたしましては、この草刈をやっている、要するに今は草刈をやればまあ甘利山の自然を残していくことにつながるとなっていますが、ここまでもいろんな紆余曲折がありまして、今、自然保護という言葉がありますけれども、これもいろんな考え方があって、例えば、全然手をつけないでそのままするのがいいのだとか、やっぱり一定の人間の手を入れてやっていかなければダメだとかいろいろあるのです。そのへんでじゃあ甘利山の例えばツツジを残していくことが自然保護になるのかどうか、ツツジも含めてそれは自然の一部ではないかという考え方の人もいまして、しかしながら、何かを目標にして、それが果たしてベストの答えかどうか分かりませんが、ツツジをとにかく残して、あそこの草花も残していこうということにターゲットをおきまして、いろんな形で調査も専門家にもしてもらったのですが、やはりボランティア団体だけですとなかなか公にお金もかかるわけですし、公な形で

きない。それはまあ市にもお願いしまして市の事業として取り組んでいただくということと相俟って、森林総合研究所というところがあるのですが、そこでかなり具体的な調査をしていただいて一定の結論が出て、今のところ草刈をしていくのが一番ベターな方法だろうとこういうことでもって一生懸命やっているわけでございます。それともう一つは時代の趨勢といいますか、流れでもあるのですけれど、ご存知かどうかわかりませんが甘利山にも韮崎市にも大きな企業が2つほど何らかの形でもって緑の森を守ろうというキャッチフレーズのもとに関わってきております。一つはコココーラだと思いましたが、これが南甘利山の森というのを、ちょうど甘利山へ行く途中に栗平というところがあるのですが、あそこから苗敷山へ行くほうの道のところに看板がありますけれど、あの一帯を南甘利山の森という名称で企業が関わっておりますし、また、さわら池という池がございます。ここはちょっと余談になりますけれど、甘利山の武田氏の話をしてみると、こちらへは5番隊の甘利備前守虎泰の地元でございます。ついこの間うちの議長が虎泰になってやりましてけれども、この甘利郷というところをかつて領地として領民として治めていたのが、甘利氏でございます。それに基づいて甘利とう名前がついて甘利山もそういう形でついたということがありまして、さわら池にもいろいろ伝説がございます。その一帯をこれはリコーという会社でございますけれど、これも同じような形に関わってきております。ところが、自然界も昔は緑を植えよう植えようということが主流だったのですが、今はこの間、あるそうした会議に行きましたら、植えろはダメだ、少し切ろうと、少しおろぬいてきていにしましょう、といったことがむしろ主流だというのが一つの例ですね。それと同じように関わり方でもいろいろあるんですね。ですから企業は企業なりのいわゆる採算というか、利益を追求するというか、あるいは自分の会社を売ろうというかそうしたいろいろな目的があって山に関わってくるわけですし、それとやっぱり私たちとか自然を守ろうとかいう形の中で若干このニュアンスが違うところがあるわけですね。そこをやっぱりしっかり話し合って共通のところを納得してやっていかないと取り返しがつかないということも往々にして考えられるのではないかとことです。そういう問題も残っております。日本のこの大きなボランティア団体もあるのですけれど、そういうところなんかは結構外国にも出て、いろいろボランティア活動をしています。またそういうところとこういう地方の一つの甘利山を守っていこうというところとは微妙に違うところがありまして、そういう考え方とも摺りあわせをしていかなければいけないみたいな問題が多々残っております。また、官公庁といいますか、管理省庁といいますか、例えば甘利山は山梨県の県立公園の特別地域というところに指定されておまして、そこに関わる所管の官庁が山梨県の林務とか観光課とかいろいろあるのですが、その一つ例えば、じゃああそのツツジを綺麗に咲かせて観光の人に来てもらってやるには眺望もやらなければならない。ツツジを残していくためにいろいろ雑木も出てきますよね。そうした雑木を切らなければいけない、ということになると今度は林務はそういうのは切ってはいけない、とこういうような問題もありまして、なかなか自分たちの思うような形でもってできない問題もあります。そういう問題をもやはりきちんとした話の中で理解をさせていただいて一定の結論を出していくということがこれからの一つの課題でもありますし、また、もう一つには今、一つの例としてこれは個人の考えでもありますが、長野県の駒ヶ根方式に本当に自動車の害というのがありますので、自動車を規制していくことも必要なかなという課題も持っていますし、そういう方向もクリアしていくことも一つの理解をしてもらおうということが協働につながるのではないかと考えております。

(市原)

はい、今お話しを承りましていろんな苦勞がございまして、さて、ここで市長さんに甘利山のことについて何かコメントをいただければと思います。お願いいたします。

(市長)

今、甘利山倶楽部というのは本当にレンゲツツジの保存で大変ご活躍いただいて、危機感を感じて甘利山倶楽部が出たわけでありまして、この長期計画の写真の中にありますけれど、昔は本当に綺麗なツツジが群生していたわけでありまして、地球温暖化、まあ私も小さい頃は甘利山というのは冬場はほとんど雪で覆われていたわけでありまして、その雪が覆うことによって植物が保護されていたということもあるのではないかとおもうのですが、それで雪解けになってツツジが花を咲かせるということだったというふうに思います。今、甘利山のスズラン、スズランも甘利山は有名なのですけれども、や

はりツツジと同じように少なくなっているわけでありまして。これは笹が本当に繁茂して笹が覆い尽くしてしまっていてツツジがダメになってきている、スズランがダメになってきていることのようにありまして、そこらへんを甘利山倶楽部の方々が先頭になって今、やっけていただいているということでありま



す。企業の方々も今環境問題が非常に問題になりまして、企業の方々が環境整備のために何々の山というような、先ほど清水さんが話したような企業の山というようなことで整備をしたりなんかしていますけれども、そういった活動もいいわけでありまして、いろいろな地域によって環境保護の仕方というのは難しい問題も絡んでくると思うんですが、南アルプスを自然遺産にという運動を南アルプスの周辺の地域の市町で今運動をしているんですが、この南アルプス自体も高山植物というのが大変有名なんですけれども、それが今、高山植物が要するに獣害によって非常に荒らされてきている大変な問題も今起きてきて

いるわけでありまして、自然を残していく、保護していくということは自然との闘いで本当に、そのほかにもやっぱり例えば温暖化、中国からの酸性雨というような問題もあったりして非常に難しい問題ではあると思うのですが、こういった問題はやはり民間の方々、また行政も絡みながらお互いに協力しながらどれだけの力になるかわかりませんが、やっていかなければならない問題だというふうに思います。

(市原)

はい、ありがとうございました。続いての質問を石川さんにさせていただきますが、石川さんは今回やっぱり市の農林課のいろんな協力をいただいてあそこまでいったと思います、これについて行政との関係あるいは他の組織との関係含めて何かございましたらお願いしたいと思います。

(石川)

先ほど申しましたように、穂坂のダイヤモンドの原石をまず探すところからまず始めました。それでいくつかそれが見つかった段階の中で、まずどれからやっけていこうかという時に、赤の発泡性のワインをやっけていこうという段階になりまして、その時にじゃあ誰がやるのかと、新しいことをするにはまず、勇気もいりますし、度胸もいりますし、成功もあれば失敗もあります。失敗はしてはいけないのですが、じゃあという時に勇気を出してくれたのが保坂耕さんでした。保坂耕さんはですね、何年前に山梨の100人という本が出版されまして、肩書きはぶどう農家です。彼がですね、まあダメでもいいからまずやっけてくれまして、今回成功しました。これを基盤にやっけて基礎ができましたので、後はですね、いろんな方から原材料を仕入れて、どんどんどんどん増やしていくという作業なんですけれども、やはりブランドというのは安売りしてはいけないものだと思いますので、高級志向でいくか本当に欲しければ穂坂に来てくださいという戦略で我々はいます。穂坂だったら買えるけれどもほかだったら買えないよと、そんなふうになんて考えているのですが、穂坂全体もですね、ただものを作って売る農業ではこれからの時代は違うのではないかと、来てもらってそこで時間を費やしていただいているということで、観光も非常に力を入れていかなければなりません。ですから、観光会社に対しても穂坂全体の魅力をアピールして観光コースに組み込んでいただくというところまで考えています。そういうことによって、先ほどの“魅力あふれる”という言葉につながっていくのではないかと思いますけれども、まだまだこれからですね、我々の力だけでは足りない部分がたくさんあります。地元選出の市会議員の先生も含めてもっともっとアンテナを高くして、いろんな知恵とかいろんなものを結集しないとまだまだスタートを切ったばかりですので、スブローグしないとしますので、いろんな方と出合っけて、今日ここにいらっしゃる方々とも何かでジョイント、コラボレーションできるような気が私はしています。みんな手を取り合っけてやっけていけたら素晴らしい穂坂、素晴らしい葦崎市になっていくんじゃないかということでどんな方がどんな方と手を携えたらよいかというのはこれからの課題だと思っています。

(市原)

じゃあ、ここでまた市長さんからコメントをいただきたいと思います。穂坂町の活動はモデルになると思いますので。

(市長)

私も3年前、選挙の時には1町1ブランドということをお話して、一つの町に一つの特色といったことを言って当選させて頂いたのですけれど、葦崎にはものすごくポテンシャル、資源が、観光資源にしてもものすごくポテンシャルがあるのです。穂坂にはやっぱりぶどうとか山とか昆虫とかそういうものがある。実を言うとおとしに今言ったぶどう農家の保坂耕さんと一杯やる機会がありまして、その時に穂坂のぶどうは何とかならないかと言う話をしていましたら、今、生食ぶどうというのはものすごく手がかかって今ぶどう農家は高齢化で生食用のぶどうの栽培というのは本当にえらいらしいんですよ。だけれども醸造用のぶどうというのはそんなに手を入れなくても良い、だから醸造用が本当にもっともって売れていっていただくと農家の方々は楽になる、だったらワインを、前も余った原料用ぶどうを農協がまとめて買ってワインを作ったということもあります。そうではなくて今、石川さんが言ったように穂坂のブランドとして出るようなぶどうを作ったらどうなの、という話をしましたら、早速ですね、保坂耕さんが今言うようにたった1トン、1トンというと720mlで1,000本なのですね。ところが、500mlですから1,400本を今年は作っていただきましたけれど、先日発表会をさせていただいたわけがあります。その席にですね、葦崎にはVF甲府の企業スポンサーになっていただいている天下鳥という焼鳥屋のチェーン店がありますね、あの社長のオーナーの鈴木正一さんという方が葦崎で農業法人を作っているのですけれども、水耕栽培をもうハウスが出来上がって29日頃にオープンするのではないかと思います、その方も招待しておいたのですが、その方はレストランを持っていますから、このワインを120本とりあえず仕入れていただきました。そしたら早速、皆さんコンピュータ持ってましたら、インターネットで見てもいいですが、ベジタブルラウンジで検索しますとホームページが出ます。昨日とおととい、このヴァン穂坂のブログの中にヴァン穂坂を写真で撮って、昨日のブログにはあの方がイタリアレストランを持ってまいまして、マリノスタウンというところにイタリアレストランがあるのですが、そのイタリアンレストランの室内でヴァン穂坂の写真を掲載していただいています。こうやって先ほども石川さんが言うように安売りはあまりしたらいかんと思うんですけど、ブランド品として成長していただければなと思っております。

(市原)

いい話ですね。続きまして高木さん、高木さんもいろいろ今、頑張っているわけですが、何か今の時点で皆さんにお願いすると言うか、何かご意見がありましたらお願いします。



(高木)

一応、バーバラハウスの開設にあたりましては、市から先ほど言いましたように家賃補助という形で、それから県からは改修費の一部ということで資金的な支援をいただいているのですが、やりはじめて1年になりますが、非常に商売が成り立ちにくくなった場所でビジネス的と言いますか家賃を払って人件費を払ってというそういう形の活動が非常に厳しい状態におかれています。12月以来、世界的な不況も相俟ったのですが、非常にその撤収も視野にいれなくてはならないような事態に陥るほど苦戦を強いられています。そこで先般、市長に現状の訴えという泣きこんだのですが、それでその翌日に早速、市の商工観光課とかでいらっやっています、現状の実態調査も含めまして経営指導を含めまして今後どういうふうにしたら良いかみんなで考えていこうじゃないかと、というような形で今いるのですが、こういった先ほどの良い話の後で、あまり芳しくない話でよろしくないのですが、開設当初とか推進する始めにいろんな協働とか支援だとかも必要なのですけれど、やはり事業が衰退した場合とか悪化した場合にどのように協働してもらえるのだろうか、行動していったらよいのかといったのがまた一つのテーマになるのかなと考えております。それで、会場に空き店舗対策の空き店舗をお持ちの家主さんがいたら大変失礼な話なのですが、非常にその現状その商工会とかの情報の中で空き店舗対象として登録されているお店が各地あるのですが、その家賃設定が非常に現状に比べて非常に高いんじゃないかと、家賃としての賃貸契約という意味ではまあ妥当なんだろうけれども、地域の経済力とかその場所の収益力から

考えますと非常に難しい金額ではないかと、大きな事業をやっていく方が出店するなら良いのでしょうか、私たち市民団体とかボランティアの人たちがそこで活動して何かやり始めようという場合には非常に難しいと、例えば中小企業診断士の一般的な意見としましては、大体家賃というのは1日の売上げの3日分位が大体妥当だと、成り立つような数字とのことです。そうなりますと例えば、10万円の家賃だとすると1日平均で35,000円位の売上げということになるのですが、果たして本町通りに1日35,000円の売上げが可能かどうかということを考えますと、大体1万から2万くらいだとするとやっぱりせいぜい5万円以下で対応していただけないかというふうに思っております。また、先ほど市原先生さんから聞きましたら、そうした地域の収益数とかのデータからいくと甲府の商店街あたりでも坪当たり7,500円というような相場が妥当だろうというデータが出ているということを経験しますと、甲府の街の中でも1日あたり2・3万の売上げしか見込めないという状況が今、実態だと思います。そうしますと、空き店舗対策でといった時に例えば、市とか商工会とか地元との関わりが強いですから、難しいでしょうけれども第三者機構による、大体団体が出る場合の家賃にしてもらえませんかというような提示がなされると、非常にあとで入ってくる団体も運営しやすいのではないかと思います。確かに、最初の1年間は補助をいただくのですが、その後2年目からはそれがちょっときつくなりますね。そういうことを含めまして空き店舗をお持ちの皆さん方も地域の活性化ということにご理解をいただいております。

(市原)

極めてシリアスな問題になってまいりました。これは市長さん答えにくいんですが、お願いいたします。

(市長)

高木さんとお知り合いになったのは、おとし小池百合子元環境大臣がもったいない風呂敷というのを作りまして、それを竜岡の高木さんの集落の奥さん方がもったいない風呂敷というのを作ったのを市役所へ持ってきて頂いた時からのつながりでありまして、この方のアイディアというのは本当にたくさん素晴らしいところがありまして、バーバラハウスをなんとか続けていって頂きたいと思っております。確かに家賃の問題等これは今後の課題として、この空いている店舗に対してこれはこの位の家賃で地主さんと交渉しながらこういった問題についてはやっぱり考えていかなければならないなと今思ったところであります。

(市原)

はい、ありがとうございます。それではですね、続いて山本さんお願いします。実は今、子育ての問題は都会の部分ではすごく大きな問題なのですね。やはり、日本の少子高齢化のためには子育てする場所がどうしても少ないという問題で山本さん一生懸命頑張っているわけですが、今何か山本さんのところで困っていることとかありましたらどうぞ皆さんにお話していただけませんか。

(山本)

私たちが活動させていただいている公民館や児童センターは公民館の主事さんや児童センターの先生たちがころよく貸して頂いたり、協力をしていただいているので、活動自体には特に不満などはないのですが、ただ、時々いつもと違った場所で活動したいとか屋外のほうに出てみんなでワイワイ騒ぎたいとかという時にちょっと韮崎市内は親子みんなで出かけて遊べるっていう場所が公園以外に少ないのかなって感じます。特に、雨が降ってしまうとやはり室内の多目的施設という場所がないので、つい別のところの場所に足を伸ばしてしまっているというのが実情です。もし、できれば駐車場があって多目的ホールという小さい子だけでなくいろんな年代の方たちと交流ができるような場所があったらいいかなというふうに感じています。

(市原)

また、市長さん、要望に近くなっちゃったのですが。

(市長)

そういった施設については、遅れている点が、児童館とはたくさんありますけれども、今山本さんが終わりのほうで言ったような施設については。ただ、屋外ですけれども中央公園に今度新しく遊具施設を4千万かけて福祉の日が10月2日ですか、その福祉の日の10月2日にオープンができるように今計画しているところでございますけれど、ただ、屋内でのあれになりますと、児童館とかそういった公民館とかのあれになってしまいますけど、今後またそれは検討課題の一つとして十分頭の中に入れていただきたいと思います。

(市原)

はい、ありがとうございます。それでは続いて隣の伊藤さん、すいません今度はシニアサポーターのほうから何かお話いただけませんかでしょうか。

(伊藤)

シニアサポーターの私たちはいきいき貯筋クラブを一生懸命やっているんですけど、地区によって参加者に非常に偏りがあるのですよね。やっぱりこれは大勢の参加者があれば地域もいきいき活性化するのはないかと思っているのですけれど、この偏りというのが見てみますと、公民館をまた、お借りしているのですけれど、公民館の館長さんとか主事さんとかが非常に一生懸命で呼びかけなども何度もやっていただいているようなところでは大勢の参加者があると。私たちもロコミで皆さんにお声かけをするのですが、やっぱり地域の方や私たちの先輩のような方は上からと言うと変ですけど、地域の地位のある方がちょっと行ってみよう、といった声をかけてくださると大勢の方が参加してくれるかなと、それから、私たちサポーターも不思議と女性ばかりなのです。市は女性を募集しているわけではないと思いますが、男性の参加が一人もいない。それから貯筋クラブのほうに出かけてくださる方も男性が少ないということで、男女の協働もあつたらいいかなと思っておりますので、是非皆さん毎日がお忙しいかとは思いますが、月に2回程度、筋肉を伸ばしたり自分の体の疲れをとるというつもりで2時間程度、地区の公民館にお出かけになってくださったら、いいかなと、私たちと一緒に楽しみたいと思います。それから、本当にささやかなお願いですけど、私たちの1年間の反省会の中で、外部の専門のトレーナーの方はボールとかダンベルとか持ってご指導してくださるわけですね。私たちにはそうしたものが全然ないわけです。中には熱心な方は自分で購入して持ってきてやっていますけれど、できたら本当のささやかなお願いですけども、保健福祉センターのほうへそのくらいのものをちょっと購入して備えておいていつでも借りられるようにしていただけたらなど、たいしたお金ではないと思いますが、よろしくお願ひしたいと思います。

(市原)

はい、またちょっといろいろな話が出てまいりました。

(市長)

今日もここには役所の人間がいますので、ダンベルについてはすぐできるのではないかと思います。昨日も老壮大学の開校式があったのですが、最近老人クラブっていうのはバタバタ潰れていく、バタバタではないですけど。70歳を過ぎても老人クラブに入らないという方々が大幅増えてきて、老壮大学においても、今年はちょっと増えたようではありますが、どんどんどんどん会員が減ってきているわけでありまして、どういう加減かちょっとわかりませんが、この貯筋クラブなんかはこの前、葦崎小学校から佐久まで78キロの強歩大会を毎年やっていますけれど、佐久市にはピンコロ地藏というのがありまして、ピンピンしていてコロッと逝ってくれるのが一番いい、確かにこれそうなんです、ピンピンしていて医者にかからないでコロッと逝っていただくと医療費というのは無くなってきますから。特に国保を運営している市とかは大変いいわけですが、やはりこうした筋力クラブに多くの人に参加していただいて健康で長生きしていただくことがやっぱり一番いいことですので、こういったものは各自治会の区長さん方にも積極的に老人クラブの方々にも積極的にPRしていくよう努力したいと思っております。

(市原)

はい、ありがとうございました。それでは続きまして、あとお二人いらっしゃいます。質問させていただきます。商工会の山田さんのほうから何かありますか。いろんなイベントを今までやってこられたので、私もびっくりしていますが、どうぞ何かありましたら。

(山田)

これからの活動展開といたしまして、青年部の方針とか述べさせていただきたいと思います。これまでですね、地域のイベントの協力とかまちづくりで成功しているところの地域の事例を研修して、まちづくりの参考にしてくるといった活動の実績もありますので、本日このまちづくりシンポジウムというのには非常に興味があるところがございます。また、このようにパネルディスカッションをやらせてもらうことによって他の団体の皆さんの意見を聞けるということは、今後の青年部の活動を展開していくうえで非常に参考になると思えました。昨年度開催した富士宮やきそば学会会長による講演会でもパートナーシップはコラボレーションという地域の各団体、また、市民、行政が連携していくことがまちづくりということを成功させていく鍵であるということをおっしゃっておられました。まさに協働という言葉で、まちづくりをしていくことだと思えます。青年部としては今までの研修を踏まえたうえで、これからの事業展開としてですが、韮崎の名物となり得るご当地グルメの研究また、開発というところで、力を入れていきたいと思えます。また、何かの時には皆さんのご協力を得るようなことなると思いますが、逆に皆さんがちょっと人手が足りなくて困っているよとかいうことがあれば是非ともお気軽に青年部のほうに声をかけていただければ、積極的にそういうところにも参加していく所存であります。また、先ほどからずっと言っていますけれど、イベントへの積極的な参加、こういうご時勢ですから普通は参加したくはないのですけれど、それをも逆に参加していくことによって人間ポジティブに生きていこうかなということもありますので、なるべく積極的にイベント等に参加していきたいと思えます。けれどもあくまで青年部というのは商工会の中の内部組織でありますので、商工会の会長さんが尻ごみをするのであれば、仕方ないかなということもありますけれど、そのへんは是非とも積極的に青年部に商工会としての活動も協力していきますので、私たちの意見も聞いて頂いた中で、イベント等決して休んだりすることのないようにしていきたいと思えます。また、行政へのお願いですけれど、今までイベント等商工会として参加してきました。是非とも自分の事業所のPRの場をもう少し、今までの屋さんといえますか露天商の立場もあるでしょうけれど、商工会の各事業所のPRの場所ということでもうちょっと良いところにスペースをとっていただいて、私たちも参加していけたらいいかなと思えます。また、今後も韮崎市の第6次長期総合計画の中にもあります、“賑わいをつくりだす商工業の振興”につながるような活動を今日お集まりの皆さんと、行政、各団体の方々とともに力を合わせて展開していきたいと思えますのでご協力よろしく願いいたします。

(市原)

はい、ありがとうございました。頼もしい限りの青年部でいらっしゃいます。市長さん答えることないですね。

(市長)

私も何年か商工会長やりましたから、ここの人たちの活躍については良くわかっているわけでありまして、ただ、中心市街地というのは非常に難しい状態となっていて、若い経営者たちも大変悩むところでございます。それがいろいろな活動を削ぐような方向になってはいけない、やはり市のほうでこういう若い人たちに活力を与えて街を活性化する方向になんとかこの人たちの力を借りてやっていくような方向に持っていったらなというふうに思っております。

(市原)

ありがとうございました。それでは最後に小尾さんのほうから図書館ボランティアをされているわけですが、私もやっぱり今の図書館を見た場合にちょっと貧弱じゃないかなと、場所も坂ですから登りにくいといったことがあると思うのですね。ですから、折角活動されていてもまだやっぱり心の中には燃焼しきれないものがあるんじゃないかという気がします。どうぞ小尾さんのほうからご意見ありました

らお願いいたします。

(小尾)

皆さん、図書館に足を運ばれたことありますよね。とても急な坂、階段を登って行かなければならない、駐車場は狭い、老朽化が進んでいるという県内に49ある公立の図書館において唯一、図書館業務にコンピュータが入っていないのが韮崎市の図書館です。なので、利用されている方はとても不便を感じていらっしゃると思っています。図書館の方たちは館長さん1名、職員1名、嘱託臨時3名の5名で仕事をされていますね。他の図書館を見ますと、隣の甲斐市なんかですと、アルバイトを35名雇っています。同じ規模ですと大月あたりでも10人ほどアルバイトを置いています。ここは既にコンピュータ業務が入っています。なのにこれだけのアルバイトを雇って目一杯仕事があるようです。韮崎市は貸し出しも手作業ですし、要するにコンピュータ導入がされていないことによって予約をかけても、誰が借りていて、いつ返せるか分からない状態で、電話がくるまで待っている状態にあります。広さ的にもとても狭くて、収蔵書も5万冊が限界です。平成20年度の市政ダイジェストで見ますと、先に年間の運営費を数字でいいますと、年間の予算1364万8千円、これは10年間ほとんど変わりなく、年間で図書購入費に充てられている資料費が580万円です。これは住民1人あたりにしますと181円ですね。これも過去10年間平行線です。とても場所的に見晴らしも良くていい場所に建っているわけですけれど、集客力がなくて使いにくいというのは皆さん感じていらっしゃるのだと思います。そんなことで、過去10年間の登録者数、利用者数、貸し出し冊数を見ると年々下がっている状況であります。それって言うのも近隣にとっても使いやすいところに立派な図書館が建ってしまっていて、皆さん人がそちらに流れてしまっているというのが現状だと思います。先日の山日新聞にはルネスの跡地の活用、解体っていうふうにあったのですよね。既存の建物を残して使うのか解体するののかはともかくとして、とにかく駅前の一等地が空いたということで、是非複合型の施設でいいので、図書館だけでなく小さい子からお年寄りまで使える施設があったり、新しい図書館があったり、小林一三さんのような人の蔵書、関係資料が展示できる施設が持てたらいいなというふうに感じています。平成12年でも、かれこれ8年、9年ほど前でですけど、当時の韮崎市長期総合計画で、住民のニーズが高まってきて図書館建設に向けて話し合いが1年半ほど持たれました。とても良い案が出て、ソフト的なことを話し合ったのですが、協議を重ねたんですけど財政状況やら立地場所ですよね、そういうことが得られなかったということで、立ち消えた形になってしまいました。それで、ルネスの跡地を活用するのに市が動いているという記事を読んで、私は、いよいよ新しい図書館に向けて行政も動き出してくれたなということをすごく感じています。街の中心に学校があるように、図書館も市民の生活の中心にあるべきだと思うのですね。とても情報を発信する場所だと思いますので、ルネスの場所はとても駅前がいいとこ、JRの駅もありますし、幹線道路も走っているし、最近商業施設もオープンしました。生活の導線上にある図書館というのは、とても利用しやすいと思うのですね。なので、今のところを使うとちょっと窓がないとか考えるところが多くて、駅から見たときにガラス張りのところに人がいて、本を読んでいる、書架があって子どもたちからお年寄りからそこにいる。駅から見たときにいいな、韮崎って、文化のまちだなんていうことを観光で訪れる方、通過する方がすごく目にする場所だと思うのですよね。だから、そういった刺激を与えるといったら良い場所だと思いますし、是非考えていただきたいと思います。よろしくお願ひします。



(市原)

市長さんもちよっと答えにくいと思いますが、答えられる範囲でお願いします。

(市長)

時間が無いようなので簡単に言いますけど、確かに今言われるように韮崎の図書館は遅れているものであります。それは十分わかっておりまして、12年に図書館建設検討委員会というのができまして、1年半検討していただいて、まず土地の問題がありましたし、また、小学校、中学校の建設もありましたのでそちらのほうにお金がかかっていましたものですから、ちょっと遅れておりますけれども、昨年、

子ども議会というのがありましたけれども、子どもさんの何人からか図書館を欲しいというお声もいただいておりますので、ルネスも絡めていろいろと検討してまいりたいと考えております。あまり長くなるといけませんのでこの程度で。

(市原)

はい、わかりました。本当は私、先ほど皆さんからご質問、ご意見をいただきたいと申し上げたのですが、時間の進行上あと7分位しかありませんので、約束ですので一人だけどなたか。

(市長)

先生、ちょっとごめんなさい。今日もルネスの問題のアンケートが入っていますし、5月の広報の中に旧ルネスに関してのアンケートというのが挟んでありますので多くの方のご意見をいただきたいと思います。以上です。

(横内)

はい、どうぞ今手を上げられた方、お願いします。

(会場発言者)

図書館ボランティアの方には経験されたことを全部話していただきました。私も長く葦崎の図書館を応援してきました者として今日はどうしてもここへ来て、図書館の話ができればいいなと思ってまいりました。本当に今おっしゃったように一番貧弱でさみしいのが葦崎の図書館です。是非、この一番遅れたことをいいことにして、他の図書館の良い部分を全部取り入れて図書館を作ったら、待っただけのかがあったと思います。本当にコンピュータの時代にコンピュータのない図書館というのは、もうこれは文化財だねと図書館会では言っているほどでしたけども、今日まで待っていたわけですからそういう運営も含めて是非、一番先の事業にさせていただきたいと思います。たまたま、駅前のルネスのこのアンケートもありますので、どうぞ皆さん、図書館が一番いいとお書きください。そんなようですから、是非図書館には本当に赤ちゃんからお年寄りまで大勢の人が集まります。先ほどのピーターラビットのグループも多目的な部屋があればそこで利用して本を借りて帰るといこともできます。もう一つ、保阪嘉内さんの手紙もやっぱり葦崎の本当のお宝です。あの物も図書館の中に入って保存して大勢の方に見ていただくこともできるので、葦崎はいろいろ素晴らしいものもありますので、図書館に集めていただきたいと思います。是非、市長さんよろしくお願いいたします。



(市原)

はい、ありがとうございます。今日はですね、もう時間でこの後、ご質問、ご意見を頂くわけにはまいりませんが、やはりやって良かったなと私は思いました。というのはですね、本音を言いますと普通ここに市長さん出てきません、他の市では。だって言われるのは分かっているわけですから。何もここで固い椅子に座る必要はないわけです。でも私たちのために、これは協働なのだと、協働はやっぱりいろんなパートナーが一つのテーブルに着いて、それで問題解決をしていくと、これが一番やっぱりねらいなわけですから。そういう面で私は今日ここに参加していただいて、意見のやりとりをして頂いて、それが今後の私はこの葦崎市の協働の第一歩、あるいは第二歩になっていくだろうとこんなふうに思っております。大変、まとめにならないまとめですが、皆さんに御礼申し上げて今日のパネルディスカッションを終わりにしたいと思います。どうもありがとうございます。

(司会者)

以上を持ちましてパネルディスカッションを終了とさせていただきます。市原先生、パネリストの皆さま本当にありがとうございます。会場の皆さま、今一度大きな拍手をお願いいたします。終わりにあたりまして皆さまにお願いがあります。本日のシンポジウムに対する感想と葦崎駅前施設旧ルネスの

活用策についてのアンケートにご協力をお願いいたします。帰りに回収ボックスに入れていただきますようお願いいたします。本日はお忙しいところまちづくりシンポジウムにご参加くださりましてありがとうございます。以上を持ちまして全日程を終了といたします。お気をつけてお帰りください。

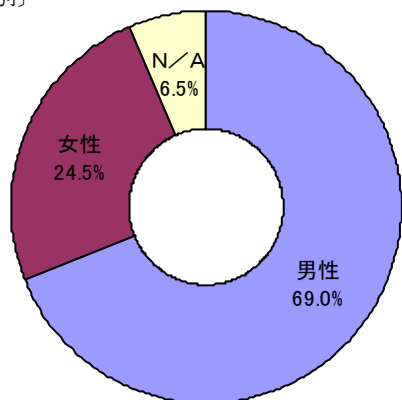


3 アンケート結果

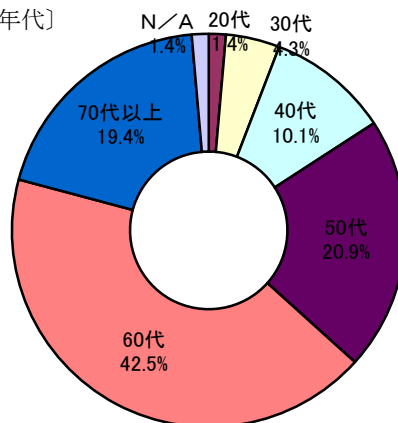
①回答者の属性

回答者の総数は139人で、その内訳は、性別では「男性」が96人(69.0%)、女性が34人(24.5%)、無回答が9人(6.5%)、年代では「60代」が59人(42.5%)で最も多く、以下「50代」が29人(20.9%)、「70代以上」が27人(19.4%)、「40代」が14人(10.1%)、「30代」が6人(4.3%)、「20代」が2人(1.4%)、無回答が2人(1.4%)となっています。

〔性別〕

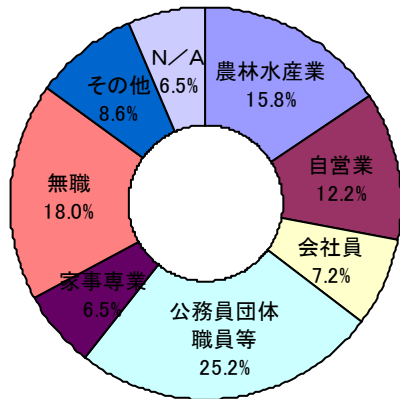


〔年代〕

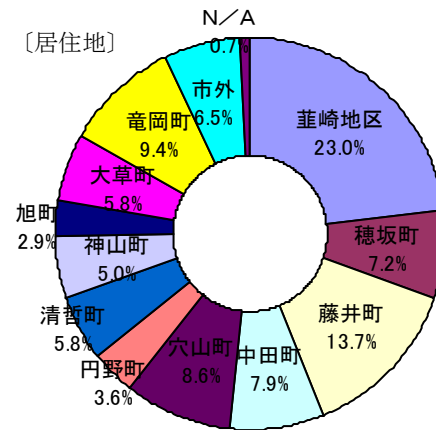


また、職業では、「公務員団体職員等」が35人(25.2%)、「無職」が25人(18.0%)、「農林水産業」が22人(15.8%)、「自営業」が17人(12.2%)、「その他」が12人(8.6%)、「会社員」が10人(7.2%)、「家事専業」が9人(6.5%)、無回答が9人(6.5%)となっています。居住地別で見ると、「葦崎地区」が32人(23.0%)と最も多く、以下、「藤井町」が19人(13.7%)、「竜岡町」が13人(9.4%)、「穴山町」が12人(8.6%)の順となっており、市外からも9人(6.5%)の参加がありました。

〔職業〕



〔居住地〕



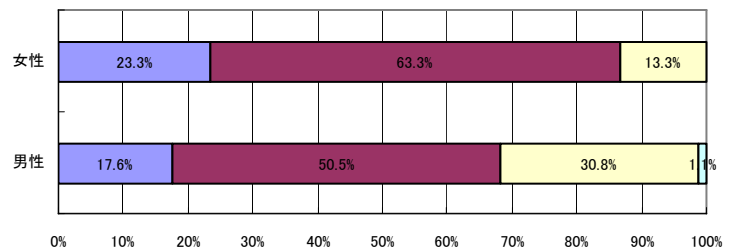
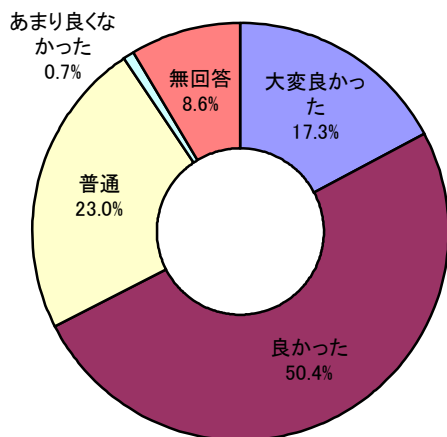
②シンポジウムに対する評価

a まちづくり講演会

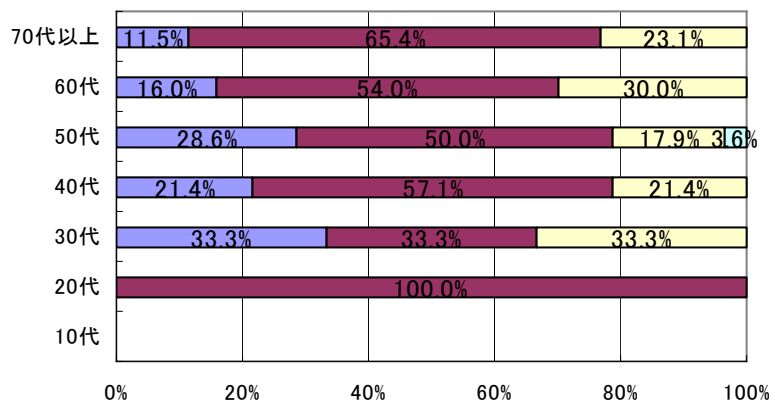
時間については、「長い」が4人(2.9%)、「適当」が100人(71.9%)、「短い」が22人(15.8%)、「無回答」が13人(9.4%)となっています。

また、内容については、「大変良かった」が24人(17.3%)、「良かった」が70人(50.4%)であり、あわせて94人(67.7%)が良かったと評価しています。

性別では、無回答を除く割合で見ると男性で68.1%、女性で86.6%の人が良かったと評価しています。年代別では、良かったと評価した人の割合は20代で100%となっており、続いて50代で78.6%、40代で78.5%と高くなっています。



■ 大変良かった ■ 良かった □ 普通 □ あまり良くなかった ■ 良くなかった



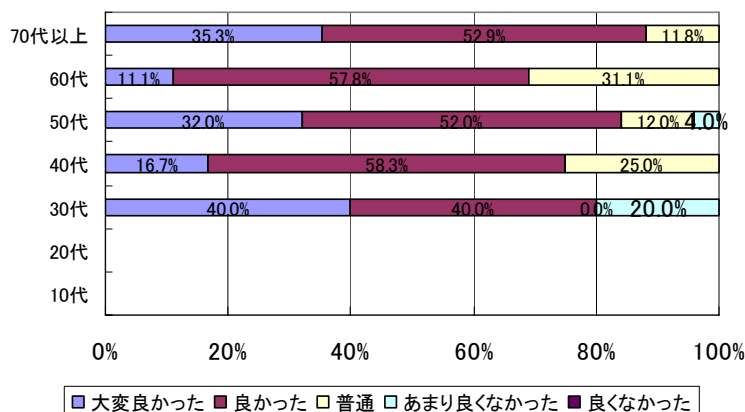
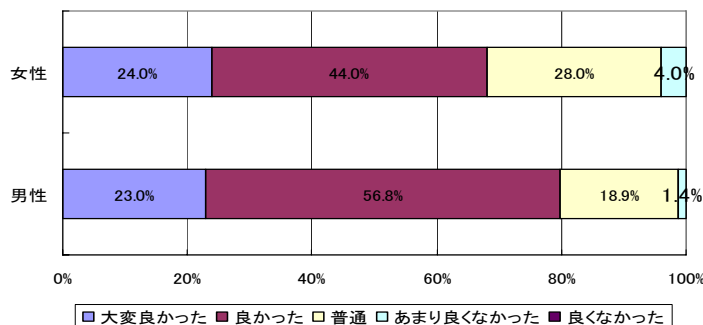
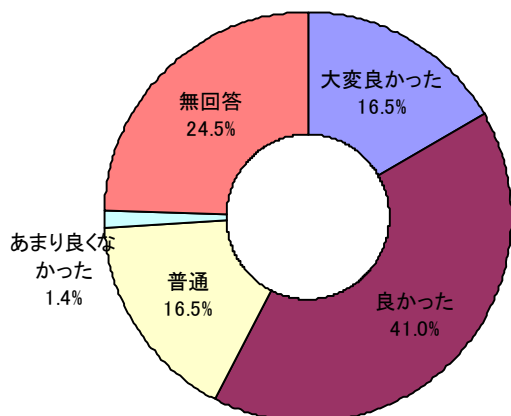
■ 大変良かった ■ 良かった □ 普通 □ あまり良くなかった ■ 良くなかった

b パネルディスカッション

時間については、「長い」が14人(10.1%)、「適当」が87人(62.6%)、「短い」が7人(5.0%)、「無回答」が31人(22.3%)となっています。

また、内容については、「大変良かった」が23人(16.5%)、「良かった」が57人(41.0%)であり、あわせて80人(57.5%)が良かったと評価しています。

性別では、無回答を除いた割合でみると男性で79.8%、女性で68.0%の人が良かったと評価しています。年代別では、良かったと評価した人の割合は70代以上で88.2%となっており、続いて50代で84.0%、30代で80.0%と高くなっています。



c 自由意見 (まちづくり講演会)

- ・「協働」というものが特別なものではなく、普通に行われていることだということがわかりました。
- ・内容がもう少し具体的に説明してほしいかった。どのように市民が協力するのか、方策についても触れてもらいたかった。先進的な事例の紹介を数多く話の中に入れてほしいかった。
- ・市原先生、ご苦労さまでした。これからの韮崎市の協働テーマに、ご支援下さい。
- ・全国のまちづくりシンポジウムの実例と成功例を北から南までをわかりやすくまとめ、発表してほしい。それをもとにみんな熱く語れる場をつくろう。
- ・もっと具体的な部分まで入り込んでほしいかった。
- ・単時間でわかりやすかった。
- ・堅苦しい話を聞きやすく説明してもらい、解りやすかった。
- ・日本人の食生活は戦後アメリカの食糧支援をたて前に、脱脂粉乳の牛乳とパンと給食で日本の米食生活を根底からくつがえされて現在に到っているため減反政策を強化せざる状況にある。これもアメリカのゴリオン大店舗法の改悪で地域に密着した商店の減少、また商店街のシャッター化、結果として高齢化が進む中老人の買い物する場所がうばわれ、独居老人が増加する中増々生活環境が悪化していることをどのようにしたら改善できるか？

- ・南アルプスの例をもう少し話していただき良かった。
- ・韮崎市は峡北の中心地であるため峡北のリーダーとなるべく第6次計画も立案を望む。
- ・人柄に好感が持てる、教授らしくないところがいい。
- ・協働の具体的成功事例（スタートから成功まで）の照会を頂きたい。
- ・市原先生の話をもた聞きたい。
- ・それぞれ報いを求めず協働に打ち込む人々に感動しました。
- ・分かり易い話でした。協働の内容が良く理解できました。（親しみ易い語り口で、事例も取り入れての話は分かり易いものでした。）
- ・もっと時間をとってじっくり聞きたかった。とくに後半の今後の展開のことについても聞きたいと思った。
- ・わかりやすい内容を以って講演いただき良かった。
- ・他県の実例を引用し具体的に話してほしかった。
- ・パネルディスカッションの導入としてのお話だったと思いますが適当だったと思います。お話が聞きとりやすく、わかりやすかったです。
- ・3つの事例がどんな形で成り立っていたのか、深くふみ込んだ話が聞きたかった。
- ・まちづくりについては「協働」が欠かせないことを強調されていました。「協働」の全体的広がりを欲しいところです。
- ・今日一日ご苦労様です。大変苦労があると思いますが今後もよろしく切願いたします。
- ・いろいろのボランティアがある事を知りました。
- ・具体的な説明があり、協働とはどういうものかよくわかった。
- ・やさしい口調と、わかりやすい説明で大変よかったです。
- ・市原先生のお話し、概要のみで時間も短く残念。
- ・協働って？話がわかりやすくて良かったと思います。
- ・6次長期計画の柱をもう少し説明して欲しかった。
- ・はじめ～今回協働の意味がわかりました。各講師のお話をきいてみて今回講演会にきてよかった。ありがとうございました。
- ・意見交換の時間を！
- ・協働についての良い事例、悪い事例などがもう少し話をお聞きしたかった。
- ・総合計画のあり方、めざすべき方向について改めてきづかせて頂きました。この実効性を高めるための協働の意識づくり、仕組みづくりを是非考えていきたいと思っています。
- ・協働の概念について大変良くわかりました。もう少し長くお話ししたりお聞きしたかったです。
- ・市原さん、ソフトに協働のこと教えて頂きよくわかりました。
- ・企画者であったから、適切であったと思う。
- ・詳しい話が聞きたかったです。
- ・熱意がとても伝わりました。
- ・市に必要と思う件について例を出して話して下さりととても良かったと思います。有難うございます。
- ・パネルディスカッションに早く移行したのは良かった。
- ・説明がわかりやすかった。数値目標実現に向かって努力してほしい。
- ・まちづくり、協働の必要は強く感じています。市民の意識レベルの向上が急務と思われまます。「良いこと」と認識しつつも実行に移せない現状。他から韮崎市に移り住んで3年。まだまだ閉鎖的地域と実感しています。
- ・広報と一緒に配布された概要版や、「協働」についていま一つ分らなかったが、今日シンポジウムを聞いてみて「協働」の具体的な意味がよく判りました。（本来はこの様な内容も一緒にガイドラインに入れて配布していただければ、市民もよく理解できたのではと思います。）
- ・「協働」の意味の説明でまちづくりが市民自らの手で行政と共に進められることと理解しました。地域の資源（人・物・その他）が具体化され、各種団体がどうリンクし合って課題に取り組むのかを地域毎に研修する時が来ていると思います。
- ・市民が自ら、すばらしい韮崎市にするという気持ちを持つ事。ここからが出発点と思う。すべての行事にも人の事と思う今の時代、ぜひ新しいこの企画が市民に理解できる事を願っている。

- ・協働の姿をイメージしやすくなりました。
- ・甘利山のレンゲつつじを市民の力で昔のように今一度大きな多くの花を咲かせるようにしたい、しなくてはならない。韮崎市の山として大切に守っていききたい。
- ・詳細説明がほしい。
- ・数値目標は評価できる。

d 自由意見（パネルディスカッション）

- ・参加者同志の意見交換の場が少い。協働を生かしてどのようなまちづくりをするのか討論を深めてほしかった。
- ・まちづくりのための社会貢献的行政支援が協働である。何となく活動の気がする。
- ・会場とのディスカッションが少なく残念です。
- ・まちづくりの熱心が伝わった。図書館は？近隣の図書館を利用することも考えてみたらどうか？
- ・各種団体によるそれぞれの活動内容が分かった。
- ・各地に大型ショッピングセンターの開設する中でますます高齢者に不親切な社会になってしまう。大きな社会の流れの中で高齢者にやさしい社会作りが見えてこない。
- ・それぞれの活動が「夢と感動のテーマシティーにらさき」にどう結び付けるのかが課題として残った。また、あと10年もすると市の老人人口が増すとされるが、ここが大きな問題だと思う。高齢化社会に向かって協働がいかにあるべきか、も学びたかった。
- ・生涯学習の町、韮崎 将来の為すばらしいまちづくりを希望する。
- ・①ボランティア活動に賛同される方を募集するように。①ボランティア活動種類を多くするよびかけをする様に。
- ・参加団体に農協関係者と公園等のボランティア管理団体があればもっと良かったと思う。
- ・パネラーの自己紹介が長すぎる。PR を聞いているようで肝心のディスカッションの中身が薄い。パネラーの数が多すぎではないか。
- ・「協働」は市に要望するのではなく、市民が目標を持って活動し市の協力を得ることだと思いますが、このことの意識づけをもっとアピールした方がよかったかな。
- ・子育て、健康、環境、まちおこし、ボランティアの各メンバーは良いが NPO 法人の方は意味が解らない。老人の知識経験と青少年教育の関係も次回に入れてほしい。
- ・それぞれの取り組みが長くつづきますよう協働が必要と感じました。
- ・経済の苦しい時代、元気にもうかる韮崎をつくってほしい。どうすれば経済の活成化につながるか！
- ・発言者がもっと的確に発言してほしい。もっと大切な発言を多く欲しかった。
- ・一部、個人利益の話はいただけない。体力作りは国家として利益は大である。もっと支援をすべきである。
- ・各々の分野で立派に活動して市の発展のためにご人尽してくださっている様子を伺うことができよかったです。又、これからのご活動をお願い致します。
- ・それぞれの団体の実情などが少しでもわかったことは良かったと思います。真剣に考える人達が増えていくとすばらしい韮崎になっていくものと思います。自身も努力していきたいと思います。
- ・人の動きを活発にするべきと思う。交通網の見直しでそれを作れないか検討すべきではないか？その中心はルネス跡となるのではないのでしょうか。
- ・市の活性化に対し、各方面からの活動の様子が伺えました。協働に行政の強い応援を期待します。
- ・様々な意見が出て意義がありました。市民も大変ですが、頑張ってください。
- ・活動内容 PR はよくわかったが、賛同してともに活動する気持ちにはなれなかった。気軽にわたしも参加しますと言えない雰囲気が感じられたのが残念である。協働するには幅広いものの考えか視点が必要なのでは。
- ・パネリストが多いため長いと感じました。スライドなど利用したら良かったのでは。各団体の活動がわかって良かったです。
- ・各団体がどのような活動をし、どんな問題をかかえているのかよく理解できた。中心になってひっ

ばっていかれる方は大変だと思いますが頑張ってください。

- ・コーディネーターの質問がパネラーに対して「何かありますか？」では、個人の思いを話すだけでパネルディスカッションの題目からずれています。コーディネーターの質問は題目に対して具体的であるべきでは。
- ・先生の話と比べて各パネリストのテーマへの理解不足によりシンポジウムとしての成果があまりみられなくなりました。せっかくいい活動をしているのに、要望のみになってしまい残念。
- ・各氏の内容、時間の長さ等良かったと思う。地元の様々な活動について多くの情報を得ることができた。
- ・各種団体等のディスカッションも欲しかった。
- ・パネリストの自己紹介が良かった様に思います。
- ・山田さんと小尾さんのお話は大変共感できました。行政には今まで以上に柔軟な対応をのぞみます。
- ・パネラーが多すぎた？ 5名位が適当。
- ・各種団体の取組や問題点などを聞くことが出来、勉強になった。
- ・各団体でまた各方面でいろいろと活動している。それがまちづくりにつながっていくことを感じている。
- ・様々な既存活動の課題と市民の生活課題をより多くの方々で共有できればいいと思いました。
- ・各々の活動がわかって良かった。自立した活動をしながら協働することが大事だと思いました。パネラー同士の意見交換があった方が良かったと思います。
- ・次回は具体的な課題のディスカッションを希望。
- ・こういう機会を増やしていくと協働が増えていくのではと考える。
- ・穂坂町の石川さんへ バン穂坂のワインの実物を拝見したかったです。
甘利山倶楽部の清水一さんへ 昨年11月のクリーン作戦の時の写真を拝見したかったです。昨年参加しました。市民の力は素晴らしいと思いました。
- ・小尾千秋さんへ 20秒程度の読み聞かせをお聞きしたかったです。◎少し小道具を持ち込まれた方がよりインパクトや活動が伝わると思いました。
- ・各団体のすばらしい活動を伺えとてもよかったです。しかし、市民が熱く感心をもって生活する事がどうしても地域性が少ない感じがします。災害に対してもすべてにおいて流された生活におさまっている感じがします。町づくりは市民が働く事と思います。
- ・協働→行政のバックアップのあるもの。無くて独自の行動をするものがあるようだ。行政に手助けを受けることは有利だろう。新しい活動が目につきやすいが以前からある団体の活動も協働による町づくりだと思う。又、地域の諸活動も最大なく町づくりの協働だろう。
- ・厳しい財政状況の中では、市民と協働で事業を実践していくことが最も大切である。今後は元気高齢者の協力が必要。指導者育成に努力すべきである。
- ・それぞれのパネラーの活動がもともと市民レベルで広がればと願います。
- ・色々な団体のことを具体的に聞いてよかったです。特に穂坂ふるさと協議会の内容について具体的に良く判りました。協働とのかかわりも判り、市内にこのような団体がからんでいると知り大変ためになりました。
- ・質疑応答の時間がなく残念！！市長への陳情もあり真剣切実な対話がありました。全てのパネラーに苦労は多いが喜びが広がる活動を住民の目線で進めていただきたいことを切望します。
- ・生の声、具体的なお話に元気付けられました。
- ・自己紹介が長い。穂坂ふるさと協議会の活動について、今後の活動を楽しみにしている。蕪崎市の発展は穂坂の台地の活用がポイントである。
- ・身近な問題等がたくさん出て、話し合う期会ができて良かったと思いました。
- ・途中での休憩時間があつた方がよい。活動内容が理解でき良かった。